

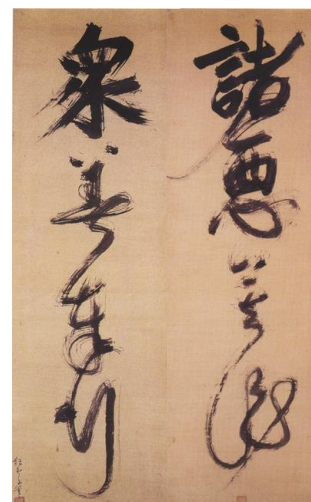
ア

カ



パウツダ

ア
カ
サ
シ
タ
リ



シ

カ



ア

ア

Prologue

斜め向こうのテーブル席に女の子がいた。いつの間にか、そこにいる。さっきまではいなかった。小学生くらいに見える。十歳か、十一歳くらいか。

髪の毛は大きくロールしながら、椅子の坐面にひるがるほど長い。豊穣なる色彩はさまざまで、白燦たるプラチナ・ブロンドの中に濃蜜な金泥の揺らぎ持つ黄金の毛が入り、いくすじかのパステル・カラーの青紫色と赤紫色、わずかに銀色を帯びた冷たいペパーミント・グリーン、甘い桃色と蜂蜜色、筆跡鮮やかな油絵の具のようなタッチで白の交ざるあざやかな水色と濃淡の異なる瑠璃色。

こちらを面白そうにじっと見ている。なぜ？

僕はまばゆさに眼を細める。

耀くその眸は燦めいて大きく、まるでブリリアント・カットのようだった。

海よりも深く、さまざまに、青蒼碧藍紺が、深みの層でモザイクをなし、燦々としている。とてもこの世のモノとは思えなかった。

放射状に広がるその光の線を、長い睫が、なぞるように強調する。まばたきすると、アゲハチョウが翅をひらひらさせて翔ぶときのようなあでやかであった。肌がミルクのように白いから、さらにあざやかさが映える。

思わず席を立ってしまった。すべては揺らいでいるような気がしている。半ば無意識に歩んでいた。歩いていたのか、世界が動いていたのかわからない。「こんな子が現実にいるのか。いるはずがない」

そうつぶやいていた。その考えは正しい。

なぜなら彼女は僕を見上げて、「あたしはアヴァローキテーシュヴァラよ」と名乗ったからだ。

第1部 単純な事実は単純に受け容れよ すなわち大乘非仏説（当たり前）

第1章 平常

……僕は喫茶店にいる。数学はいつもここで勉強していた。掛け時計がコツコツと鳴っている。蒼穹は静謐であった……

そんなことを考えもなしにノートに綴っている。微分や積分を解かなければならないのに。

挫折や侮辱への怒りなど、自己防衛機能が止めば、心は静寂だ。だが、人の心は喪えない。だから、中庸に努めたい。出来るかどうかは別にし。

そうさ。

でも。

ノートは薄いブルーの表紙。薄い青灰色の罫線が引かれていた。場所は『カルチェ・ラタン Quartier latin』。

カルチェ・ラタン（ラテン地区）か……

むろん、セーヌの左岸、5区と6区に跨る地域、のことではない。

畑に囲まれていた喫茶店だ。前には、発着時刻板とベンチしかないバス停。隣は、瓦上に「睿智遍照」と浮き彫られた扁額を掲げる古い書肆。

道を挟んだ向かい側、私立眞神幼稚園・私立眞神小学校・私立眞神中学校・私立眞神高等学校などを包括する、眞義私塾眞神大学の広大な敷地。

眞義私塾という名は実は眞神大学の前身であった。

時折、「我が校は藩校以来、創立260年を迎え……」などと自慢する学校の声を聞くが、眞義私塾はその比ではない。起源は紀元前6千年にさかのぼるが、大本はもともと古い。

初代王、彝玖邇が眞神神殿に學傳授の講を設けたことが始まりという。西暦2020年より一万年も前のことだ。

だが、由緒正しく歴史古くとも、眞義私塾は昭和末期になっても学校法人として認められなかった。眞神族伝統の哲学や文化を教えることを旨としていたからだ。それも平成以降、大いに改善（？）され、ようやく学校法人の法人格を得た。

彼は、中学二年のとき、いくつかの試験を経て、眞神大学への進学準備学級に入った。この準備学級をリセと呼ぶ。

普通は高校一年のときに試験を受けて9月に編入するのだが、特に優秀な者は中学からも飛び級制度で入って来る。そのうちの一人だった。

編入後、二年半の間に毎週いくつもの試験を突破し、成績順位を競うこととなる。だから寸暇を惜しんで勉強しなければならない。

教科ごとに場所を変えて勉強していた。彼は数学をここと決めている。タブレットをにらみ、微分積分に集中していた。

明日の哲学は捨てて、明後日の数学に賭ける。

哲学の試験は最も苦手だ。

制限時間は6時間。軽食もトイレも可だが、嚴重なチェックが入る。問題はいつも一問。今日の出題は『ウイルスが新陳代謝しないことの生物への意義を非科学的に応えよ』だった。

むろん、これは理科の問題として出されたものではない。哲学として解くのだ。確かにウイルスは新陳代謝しない。生物はする。それに就いて意味の究明をするのである。

ようやく終わって教室を出た。廊下で背伸びする。窓の外に見える前庭から正門までの景色は午後三時だった。

日差しは強いが、秋聲を孕んでいる。

「よう、どうだった、史^し韋^い毘^び」

天易^{あまやす}が振り返ると、天之^{あまの}だった。

同じ眞神中学から編入で来ている。

「散々だよ、玄鳥^{くろうとう}岨^ど」

「へー、天易家のおまえなら、楽勝だと思ったけどな」

天易家は古来、天文遁甲、卜筮、太占、陰陽を司る一家で、古代に於いては学者の一家と言える。

「一家系で皆同じなら、ウイルスに絶滅させられるよ」

雌雄が分かれているのは、遺伝子を交ぜるためだとも言われる。

もし、皆が同じ遺伝子ならば型の合うウイルスが現れたときに、同時に死して絶滅する怖れがあるからだ。個々人が異なるのは、生き残るための生命の叡智と言えた。

「まあな。」

けど、大概の愚かで劣った人間はそういう見方をするんだぜ。○○民族の性格はこうだ、とか。○○教徒はこうだ、とかね」

「知ってるよ。」

僕ら眞神族が優秀な民族だと言う連中と同じさ」

「すべては科学と数学に基づかないと、平和と真実を破壊するよな」

「あゝ、そうだね」

遠い眼で史韋毘は肯んずる。

『そうさ、生物は捕食や光合成によって自分で新たなエネルギーを作る。そのエネルギーで細胞分裂して自己増殖する。』

ウイルスは死の生き物だ。自分でエネルギーを作ることができず、細胞に寄生して増殖

する。新陳代謝がない。だから死なない。

そもそも生きていないのでは、と言う人もいるくらいだ。

たとえ一時的に生命活動を中止しても、破壊されない限りは、再び条件がそろった時点で活動を再開する』

想いに耽る自分を可笑しそうに見ている玄鳥呷の表情に気がつき、史韋毘は自分の事しか考えてなかったことに思い至って顔を赤らめ、

「そういう自分はどうだった？」

と問うも、銀髪に染めた親友は史韋毘の心を見透かして気にするなよというおどけた顔を作り、

「何が？」

「試験さ」

史韋毘は少し腹立たしく思うも、玄鳥呷はさらに可笑しそうに、

「へへ、上手く行ったと思うぜ。まあ、哲学ってのは、正解がないから、わからないけどな」

「そうか」

小さな怒りを恥じてそれをなかったことにするために、史韋毘が再び遙かな眼になるのをじっと見てから、玄鳥呷は微笑し、手を振る。

「じゃあな。」

俺、数学Ⅰの講座、申し込んであるんだ」

「あゝ、またな」

眞神高の廊下に出る。リセは高校の中にあつた。玄鳥呷以外は高校生ばかりだから会話もほとんどない。知り合いの高校生もいなくもなかったが、くだけて話せるほど親しくはない。

だからいつもすぐ寮に帰って勉強する。悪い循環ではない。そう思っている。

今日の試験会場が第三棟の第9試験室だったので、彼は初めてこの棟の三階を歩いていた。

この棟はセミナー室や小講義室、試験室などの他に、印刷室や教育相談室、生徒会室や文化部の部室がならぶ場所だ。

片仮名、漢字、そして梵字が眼につく。

「パウッダ倶楽部？」

何だ、それ？」

引き戸が開いていたので盗み見るように覗くと、

「哲学は諸学の基礎なのよ」

そう言つて部員たちを睥睨するように見廻す背の高い少女。

平衛舎利子だ。彼女は普通学級の生徒だ。だが、史韋毘もその存在をよく知っていた。

二年A組、理系クラス。有名人だ。

緑の黒髪を真っ直ぐ腰まで垂らし、切りそろえている。前髪もまつ毛の上で真一文字に切りそろえられていた。まなじりの切れ上がった強い眼が常に睨いているように見える。あたかも朱雀のようだった。黒いパンツ・スーツ姿が凛々しい。上着は短かった。

ちなみに、眞神高に制服がない。頭髮も自由であつた。

『何だか、フッサルみたいなこと言ってるなあ』

史韋毘は内心につぶやくが、まるでそれが聴こえたかのように舍利子が振り返る。

「何っ？」

「あ、いや、何でもありません」

「うちの倶楽部に興味があるのね」

「ええ、でも、僕はリセなので」

リセにいるうちは部活動などない。勉強する時間しかない。二年半、太陽を見ないときえ言われている。

「睡眠時間を減らせば不可能ではないわ。授業自体は十七時で終わりのはずよ。部活は十八時三十分まで許可されてるわ」

「でも」

「でも？」

「なぜ哲学の話をしていたんですか？」

「なぜって」

「だって、バウツダって、仏教のことですよね？」

「あー、そういうこと。」

知らないの？ 仏教は哲学よ」

「まあ、そうとも言えるかもしれませんが：」

「釈迦は宗教の自由を認めていたわ」

「そうなんですか」

「そうよ、知らないの？ 教団内で宗教の自由を認める宗教なんてあると思う？」

「あつてほしいとは思いますが」

「そうね、言われてみれば、そういう方向もいいかあ。：：うん！

やっぱり、あなた、入るべきよ」

「いえ、すみません。僕は」

「あなたは好きはずよ」

「それは：：違います。全然違います。ごめんなさい、失礼します」

史韋毘は小走りにその部屋を出て、学寮に向かった。

近道をするという理由で、テニスコートの傍らの小径に行く。眞神中の女子テニス部が練習していた。どうしても見てしまう。

楽夏がいるからだ。8月までは同じ中学二年生だった。史韋毘の編入以来、会うこともなくなってしまったが。

陽射しにきらきら輝る小麦色の肌、息遣いまで聞こえそうだ。夏になると海辺のテニスコートで合宿をするせいで彼女の髪は光に透かすと、茶色っぽい。しなやかで毬のように躍動する筋肉。黒目がちの眸。凜としている。

腹筋と背筋を充分に使おうと、大きく反ってから打つサーブはまるで跳ねる魚のように生命の輝きに満ちていた。

少し毛先にパーマをかけたかなあ。そう気がつくとき、史韋毘は暗澹とした気持ちになる。嫉妬か。ふ。

「いいのさ、僕は究竟の真理に達するために、全てを捨てるんだ」

そう独りごち、眼を伏せて顔を背け、進む。

その夜、学寮の食堂で玄鳥叟に話した。

「あゝ、そうさ。有名だよ、本当に。舍利子だろ。部員に喝を入れるため、3時間ぐらい、立ったまま延々と演説ぶつ奴さ。聴いている連中もずっと立ってるんだ。堪ったもんじゃないらしい」

「よく部員が続くな」

「カリスマ性さ。皆何だかんだ言っても心酔しているんだ。そうじゃなきゃ、そもそも部員になんかなるかよ。」

だってさ、部員って言ったって、正式に認められた部活じゃないんだ。顧問もないし、あの部室だって、本当は文学部の部室だ。文学部の部長の嘉祥が心酔者の一人だからな。乗っ取られちゃったのさ。

先生は文学部の活動だと思ってるよ」

「しかし、バウッダ倶楽部って、意味が解らないね」

「そおうか？」

おまえは、そういうの、好きな系統かなあって、思ってたけどなあ」

「ふざけるな。」

そんなわけないさ」

第2章 異常

記述試験も苦手だ。

三人程度の生徒で一人の教師に対し、設問に対する答えを言葉で説明するのだ。

毎日テスト、毎日順位発表。寝る間も惜しんで勉強するしかないが、焦りと緊張の連続で常に追い込まれている。

内容はぐだぐだだった。ともかく終わって安堵する。しかし明日も試験かと思い、すぐに表情は曇ってしまった。

もう何日も明るい気持ちになったことがないような気がする。

「さあ、行こう」

筆記用具と参考資料を鞆に詰めて席を立った。

「あーあ」 思いつ切り伸びをする。

今日は第三棟の第8試験室だった。廊下に出て、ふと影に気がつき、面を上げると、舍利子が待っていた。

腕を組み、可笑しそうに史韋毘を見下ろしている。

「さあ、来なさい。」

あなたはもうバウッダ倶楽部の一員よ」

つかまれそうになった腕を背後に引き、一步下がった。

「そ、そんな」

舍利子は余計に可笑しそうにする。

「いいから、来なさい」

鞆を楯にして、

「待ってください」

舍利子はわざとわからないふりをして眼を丸くする。

「なぜ？ 今日の課業は終わりでしょ？」

舍利子がわからないふりをしているのが演技であることがわかっていても、史韋毘は焦ってしどろもどろ。

「で、ですから、寮に帰って勉強しなくちゃ。数Ⅱの課題と英国建築史のレポートが間に合いません」

再び腕を組み、ふーん、という表情で見下ろし、

「そうなの？」

でもね、全ては意志が決めるのよ」

「そんなことはありません」

「あるわ」

「ありません。」

物理的な制限は超えられないでしょう？」

「現象としてはね。」

でも何だかのかたちで超えられるわ。すべては心々よ。でしょ？

気力よ、根性よ。

真理のために邁進する勇猛心はないの？」

「ありません：。」

そう言いながら顔を逸らす。

「ふーん。」

ほんとーかなあ？」

逸らす顔を覗き込む舍利子。

急に憤りが込み上げてきた史韋毘は頬を膨らませ、無視してそのまま行こうとするも、185cmの舍利子につかまれてしまった。動けない。「さ！」

「やめてください」

「やめないわ。本気じゃないでしょ？」

私はね、魂の声しか相手にしないのよ」

かくして叫びも虚しく、たちまち引つ張って行かれた。

部室には三人の学生がいる。

「よお、俺が炎嘉祥^{ほのかしやう}だ」

濃い顔つきで鼻が大きい。龍顔だ。たくましく背も高い。

「よろしくー」

そう言った小柄な少女が彝佐木蓮^{いさもくれん}だった。縦ロールにしたツインテールの髪はペーパードット・グリーン、レースのフリルがふんだんに盛られたゴスロリ系ファッション。

痩せて柔弱な色白の長髪の天平奏舞^{あまひらそうぶ}定が丁寧^{ていねい}に辞儀し、

「天平です。よろしく」

歎息して史韋毘は諦めた表情を作り、壁に寄り掛かった。

「でも、どうしたらいいんですか」

顔を上げないで、情けない声を出す。

自分でも何に就いて訊いているのか判然としていなかったが、実際、何もかもわからなくて、全てに就いて問うていた。

舍利子が決然と言う。

「神社に行くわ」

「え？」

「何愕してるのよ」

「だって、：：なぜ、何をしに」

「虎穴に入らずば虎兇を得ず、よ」

「え、ええ？」

「安全策は講じてあるわ」

「ええ？ ええっ？」

寮に一度帰って着替えることを許され、律儀にも敷地内の小径を急ぐ史韋毘は四人の少女とすれ違った。

これもまたちよつと有名な贅家^{いしだたみけ}。いずれも高一の宝珠・曼珠・沙華・蓮華だ。

ある意味、舍利子に似ている。親戚関係の四人は髪形や服装は異なれど、いずれも眼つきが鋭い。剣道や空手やボクシングやキックボクシングをやっているせいかな。

「おい、君」

「え？ ：：あ、はい」

初めて声を掛けられ、びっくりする史韋毘。

「どこに急ぐ？」

なぜそんなことを突如訊かれるのか疑念に思う暇もなく、

「あ、あの、平衛舍利子先輩に言われて、どこかへ行く途中で、です！」

「どこか？」

「す、すみません、わからないんです」

「なるほど。良いだろう。行け！」

「は、はい！」

何だったんだろうと思いつながら再び走る。

社は鬱蒼たる森の中にあつた。少し高台になっている。濃い緑でこんもりした丘だった。

白舟神社は白舟家の氏神である。

それは畝邨村にあつた。

眞神駅から単線眞神鉄道に乗って一駅、畝邨駅を降り、正四位上（眞神王朝に於ける冠位）白舟神社の前に立つ。徒歩で十五分ほどだ。

白舟家の家紋である三叉戟の紋があり、濃い紫の幕が門に掛けられている。祭られる神は戸璃兔邇栖^{とりとうにすね}の伊弉禰^{いすね}の神。

海もしくは湖の女神だ。智慧と戦闘の女神。

「さ、入るわよ」

舍利子を先頭に進む。山門をくぐった。

嘉祥、木蓮、奏舞定と続く。

「あれ、拝殿はこっちじゃ」

史韋毘が言うも、

「いいのよ、こっちよ。問題の場所は」

「問題の場所？」

おおやまくいのかみ

そこは小さな祠だった。大山咋神を祭祀している。

何もおかしいところはない。

「なぜ問題の場所なんですか？」

「よく見て、おかしいと思わない？」

舍利子が叱咤するように言う。

「そんな、何も」

よく見た。眼を凝らした。

何だろう。わからない。わからないことだらけだ。

嘉祥が助け舟を出した。

「見ろよ、草が斃れているだろ。

不思議に思わないか」

「うーん」

何か違和を感じる。

奏舞定も微笑し、

「祠の前から、十数メートルにわたって。左右に割れているよね」

史韋毘もそれは認めた。

「言われてみればそう見えなくてもないですね」

木蓮がニコニコして言う、

「まるで何かが祠から出て来たみたいでしょ？」

「え！」

第3章 とてもかくても

確かに言われてみれば、そんなふうに見えなくもない。

そう考えたが、実際にそうであるはずがない。そう見えるだけだと、史韋毘は考えていた。

しかし、バウッダ倶楽部の連中の態度はそうでもない。

嘉祥がじつと地面をにらみながら、祠の周りを廻った。

舍利子はぐると頭を廻らし、周囲の木々の上を警戒するようなそぶりを見せる。

木蓮は幼く見える顔に真剣な表情を浮かべ、祠の扉を透かして奥を覗きようとするかのよう凝視した。

奏舞定だけが無関心な態度で腕を組み、遠くを見ている。

「いったい、何なんですか？」

史韋毘は訊かずにいられない。怖気を感じる。

舍利子は応えなかった。

周囲を見廻し終わると、まなざしを集中し、声を出さずに何かをつぶやき始める。まるで咒を唱えているかのようにであった。

「史韋毘」

嘉祥が突如、声を掛けて来る。

「はい」

「油断するな、いくらおまえでもな」

「え、それってどういうことですか？」

そのとき雲が過ぎつて、翳が差す。

やや涼し過ぎる湿った風が吹いた。ひんやりと感じる。

「空気が変わった」

奏舞定がそつと言う。

史韋毘は何か言い知れぬ怖気を感じた。何、何だろう？

木の太枝の上に何かいた。

不気味な置物ように見えた。

顔は埴輪のように空漠で表情がない。しかし頭が小さく、体が大きくオランウータンのようだが、脚はカンガルーに似ていた。毛の代わりに垂れ下がるのは、苔や羊歯やツタ類である。

「うおほおっー、おほーっおほうっー！」

法螺貝のような声で吼えた。

「山の祇か」

「大山咋の神の眷属だ！」

跳び上がり、彼らの中心に着地する。地面が揺れた。舍利子も嘉祥も奏舞定もさつと飛び退き、四方に離れ散る。木蓮は最初からその近くにいなかった。

史韋毘だけが遅れて化け物と対峙してしまう。

「う、うわー」

恐怖に叫びを上げる。腰が抜けた。

「妖怪め、こっちだ！」

嘉祥が叫ぶと、物の怪は振り向く。

嘉祥は印契を結び咒を誦す。

「唵阿毘羅阡欠蘇婆訶（オン・ア・ビ・ラ・ウン・ケン・ソワカ）！」

しかし、物の怪は動じない。

「ちっ、だめか」

舍利子と言う、

「ここらは彼らの聖域なのよ。力は相殺されるわ」

「くそっ、そうだな！」

「これが『地の利』つてもものだね、さあ、逃げようよ」

奏舞定が笑いながらそう言った。

「あはは、さあ、逃げよう！」

木蓮が九字を切ってから門へと奔り出す。

「よし、じゃ、僕も」

奏舞定も奔った。

「さあ、立ちなさい！」

舍利子が史韋毘の腕をつかんで引つ張る。本日、二回目だ。

「唵跋折囉駄都鑠蘇婆訶（オン・バサラ・ダトバン）！」

嘉祥が真咒を唱えて援護する。

「うおっほー、うおっほー、ほーっ！」

脱兎のごとく逃げる。物の怪は木に飛び上がり、木から木へと飛び移りながら追い駆け
て来た。石段を転げ落ちんばかりに走り下る。

「うわ」

苔生す腕が延びて来た。史韋毘は捕まりそうになる。

「早く」

舍利子がさらに強く引く。

「い、痛い、イタタタッ」

「男でしょ！」

嘉祥が振り返り、

「空しからじ、毘盧遮那仏よ！」

唵阿謨伽尾盧左曩（オン・アボキヤ・ベイロシヤノウ）」

光が生じ、物の怪がひるむ。躰から垂れ下がるツタ草が燃えた。

「ぐわっ、ぐうお、ぐおおわー！」

「さ、今だ！ 急げ！」

「山門を抜けて、境内に入れば！」

すぐ隣の貞観相国寺の石段を上がる。山門を抜ける。物の怪も駆け上がり始める。速い。

「追いつかれる！」

山門は目の前だ。だが。

「あ！」

追いつかれた。物の怪は山門を背に皆衆の真向かいに立つ。

「しまった！」

「だめか」

舍利子が皆を振り返り叫ぶ。

「曼荼羅を組むしかないわ」

「しかし、それは！」

嘉祥が強く反駁する。

「いや、それしかない」

奏舞定も舍利子に同意する。

「やむなし」

嘉祥がうなる。

「そうよ、ここで滅んでは意味がない」

「いずれはこうなることよ」

「定めだな」

「さあ、行くわよ」

口々に唱える。

オン・アボキヤ・ベイロシヤノウ

偉大なる印を有する御方よ
宝珠よ
蓮華よ

摩訶母捺囉
麼拏
鉢納麼

ジンバラ・ハラバリタヤ・ウン

入嘽攞 鉢囉轆哆野 吽

存在する真理だ。実在の真理、力為す真理だ。

刹那はすべてを蔽うかにも見えた。

「うぎやぐわわあああーっ」

空間を歪めながら消える。

「さ、今よ」

「あれは何だったんですか？」

というだけで、史韋毘には何もわからない。

ともかくも古刹なる貞観正國寺に一時避難。本堂に上がると、四天王おの立像があつた。

「これで我々の存在があらさまになってしまったな。存在とは自らを知らしめすことに他ならないからな」

嘉祥が言うと、史韋毘は訝しく思い、

「え、なぜですか。誰にも見られていないと思うけど」

木蓮が笑った。

「世界中に鳴り響いたわ。」

大きな隕石が落ちて太平洋が干上がるくらいのレベルよ」

「そうだな。」

これでは、目覚めていた者は当然で、未だ眠っているはずのいにしへの神も目覚めただろうな」

「いにしへの神？」

史韋毘は愕く。

「さあ、説明はもどかしいわ。」

あなたも眼覚めなさい。

言葉の説明は形骸でしかない。真理の言葉も記号でしかない、しかも無意味なね。鳥は鳥、蝶は蝶と言っているようなものでしかない」

嘉祥がうなずき、

「そうだ。わかるまい、史韋毘。」

ともかく、さあ、こっちへ来いよ」

四天王に護られた観自在菩薩の立像の前に立たされる。すると、像の後から四人の人間が現れた。少女たちだ。整家の宝珠・曼珠・沙華・蓮華であった。

彼女らは言う。

「あゝ、やつぱりこうなったわね、でも、いずれはこうなる運命なのよ」

舍利子が言う、

「さあ、力を」

「いったい、何を」

史韋毘は少し怖くなった。

木蓮が復笑う。

奏舞定が、

「心配はないよ。」

四天王の加護の結界に入り、観自在菩薩の加護を得る。それだけさ」

「ええ？」

問う間もなく、宝珠・曼珠・沙華・蓮華が史韋毘を囲むと、

「天彝欣求急急如律令」

少女たちは印契を組み、そう唱える。

光の柱が床を突き抜けて上へ奔り、天井を抜け、天への柱となって衝く。彼の腕に黄金と青の文様が光輝して浮かび上がる。光輝が顔を下から照らす。

「あゝ、これは」

何かが衝き上げた。

意識が光の潮に飲み込まれ、魂が飛翔する。翻る。天翔くも身を裂く。

「あゝ、あゝ」

全身が聖なる耀の鎧に装甲されていた。手には戟を持つ。

「凄い。」

思った以上だわ」

舍利子が思わずつぶやく。

木蓮は声も出なかった。

「ほんとうに、想像以上だったな」

嘉祥がうなる。

奏舞定は静かに言った。

「太古の神、シヴァだ」

眼覚めとともに、史韋毘は理解した。

真の理解だ。

言辞による理解は「納得」という感情、心的な現象でしかない。

実体のある理解を得た。

そのときだ。

途方もない力の接近を感じる。

「バカな、ここまで来られるものか」

嘉祥が言うも虚しい。

荒ぶるヒノモト（火之本）の神が出現した。

四天王の像を斃し、観自在菩薩の像を裂いてあらわるる。

「素戔嗚の大御神！」

「いきなり大本命か」

「もう戦争は始まってしまったわ」

舍利子が言った。

彼女も印契を結び、咒を唱える。

仏陀の眷属の鎧を身にまとう。嘉祥も奏舞定も木蓮も印契を結び、咒を同じくした。彼

らは四神のごとくである。

宝珠・曼珠・沙華・蓮華らも散って素戔嗚の四方を囲む。四天王のようであった。

八重の囲みができた。

第4章 歴史

時空はページのようなものだと言って差し支えない。

つまり、この世に差支えなどないということだ。

さて。

飛天が現れ、ページをめくる。すると、そこは、同時進行する今（西暦2017年）から凡そ1800年前。

広々と横たう古代の蒼い海。帆を張り、船は波を白く裂く。

幾日かを過ぎ、船は河とも海とも区別のつかぬ、広大なる河口に入った。

史韋毘は族長の長子として、漢に渡り、劉邦の偉業を訪ね、その子孫である劉備玄德や張飛、関羽雲長らの蜀と魏の曹操などとの闘う史を知り、又様々な文化を学んだ。

特に老子や莊子を中心とする道教の教えが興味深く感じられた。既に基督教もローマの隊商を通じて知られていた。

史韋毘は酸圖と号する道教の師に尋ねた。

「しかしながら、師よ、なぜ基督教は愛と説きながら異教徒を排するのでしょうか」

「存在を固有とすればそうなる。顛倒夢想じゃ」

史韋毘は考え込んだ。それは仏教の教えに似ているように思えた。

宗教や国や民族は精神を高揚させるが、又大きな犠牲、不幸、憎しみ、悲憤、悲劇と虐殺を生む。

『空を行く鳥は国境を知らない。

花々はどのような信徒にも微笑む。

日差しはいかなる民族にも差す。

いったい、国家宗教民族は現実なのか。だが、切実に人間の生死に関わり、とても幻影とは言えない』

そんな憂悶の日々。

街で説法する沙門の中で、この人と思う人に問うた。

「なぜ色受想行識は存在を固有とするのでしょうか。なぜ人は生まれながら（初めから）真理たり得ないのでしょうか。なぜそうであつてはいけなかったのでしょうか」

「否。

そして是。

汝の想いは、異逆しておる。まさしく汝の言うとおりだが、汝の言うもまた、存在を固有とするから、さようにも想えるものであると知れ」

だが、どうすればいいのか。

帰国後、史韋毘は父に問うた。

「神は汎てであり、完璧であり、全知全能である、と外国の人らは言います。また彼らは異教徒を弾劾します。排他的です。

しかし、全知全能ならば、なぜ異教徒が生じるのでしょうか。全能ならば、異はあり得ない。彼らの言は矛盾です。もしくは自らによって自らの神の無能を晒しています。それに真つ当に答えられる人を見ませんでした。

もし、神が全知全能なら、今の世が正義であるという結論しかありません。異教徒がいることが正しいと言うしかありません。現状が神の意向そのものだと言う他はない。在り得ない。

もしくは、神は全知全能ではない、と言うしかありません」

父、阿弓之易は長鬚を蓄えた巨漢だった。大陸から学び、倭人に先駆けて眞神で製造した鉄の剣を左右に佩いていたが、その重さは一〇貫ほどもあり、常人ではとても振るえない。彼は騎馬を操りながら、あたかも竹刀のように眼にも留まらぬ速さで空間に彩をなすことができた。

「息子よ、おまえは何を学んだのだ。おまえの言辞も矛盾する。

存在を固有と観るからさように彷徨うのだ。仏説を能く学べ。なぜ仏陀が宗教の自由

を述べたかを」

彼はさらに問うた。

「では、父上、なぜ我が家は他の家と異なり、眞神族でありながら、眞神の神に抗って、仏教を護るのでしょうか」

「答は常に同じに帰結する」

史韋毘はそれでも納得し切れなかった。

「仏教やキリスト教には一民族を超えた普遍的な人類の価値観があります。

とは言え、基督教は審判的で、正義を奉じ、固定観的で（人は全て同じですけど）、又仏教は世俗の価値を否定し、社会の基盤を壊します。その原理主義的な一部の過激派は、さらに全否定的破壊的な新佛教を唱えています。

又その気運を案ずる眞神古神道派の神々は先制攻撃を試みようとしています」

第5章 実存する真理

驚くべき仏教の力に史韋毘は愕く暇もなかった。

素戔嗚は神剣を振るうも、四神四天の做す大宇宙の大曼荼羅にあつては虚言のごとく虚しかった。

その様子を妙観によつて観じていた老鬚幾千丈の思兼の神は大いに考え、終に八百万の神々に告げた。

「仏教は宇宙の理に通じている。

我ら命運をかけて秘術を復活させるべし。仏教排斥のため、古代神を甦らせよ」

轟音が天空に轟いた。

雷鳴とともに雨は勢いを増し、凄まじい土砂降りとなった。

巨大な何かが近づくのを感じる。

「あ、あれは」

史韋毘は思わず叫ぶ。

「龍だ。

しかも地方の龍じゃない。宇宙の龍脈を繋ぐ超弩級の大龍神だ」

奏舞定が緊迫した面持ちで言う。

舍利子は平然としていた。

「ならば大宇宙の真理、自然法爾の仏を請来しよう」

彼女が唱えたのは、今日の最初に唱えたものと同じく、大日如来（毘盧遮那仏）の真咒であつた。

唵跋折囉駄都鑠蘇婆訶（オン・バサラ・ダトバン）

唵阿謨伽尾盧左曩（オン・アボキヤ・ベイロシヤノウ）

曼荼羅を做す皆が唱えた。

「史韋毘！ あなたも詠唱するのよ！」

舍利子が叫ぶ。

史韋毘は焦った。しかし、口は知らず知らずに実在する理を唱えた。

唵跋折囉駄都鏐蘇婆訶（オン・バサラ・ダトバン）

唵阿謨伽尾盧左曩（オン・アボキヤ・ベイロシヤノウ）

第6章 汎神無際限

却説、爰より異次元の領域に至る。

神門は啓かれたのだ。どうぞ。

では、ぴら。



その効果は凄絶だった。

宇宙そのものである大日如来の耀きは、まさに偏照であり、光を超える金剛至極の光燦であつた。

人にとつては大地すら無窮に見える。

しかし、その全てを集めても、それは海の半分もない。

蒼穹はどれほど無窮だろう。

しかし、太陽は地球の百倍もある。

太陽系の広さはその比ではない。ましてや銀河系は。

銀河団や超銀河団は。

大宇宙の広大さよ。地球を一秒で七周半もする光が四百数十億年という途方もない歳月をかけなければ端まで行き渡れない、想像すら到底、遙かに遙かに及ばない、大宇宙。

その大宇宙そのものである自然法爾、毘盧遮那仏 महावैरोचन。

想像を絶するその巨大さ。無相無二。異叛外他といういいことがない。無空ということは存在（現実・実存・事実）ということ。

全知全能完璧無限ならば異叛などありようがない。

第7章 神

神嚴なる奥の奥なる奥義に於いて、燠火滾るがごとく懊悩する太古幾千億兆星霜もの歳月を経る千丈の白髯千丈の白髪、太白神のような大翁。縛られぬ自由なる思惟を凝らし、無際限なるブラック・ホールのごとく光や時間さえも吸い込み、歪めるほどの力で収斂し、結実させる。

思兼神は、さらに甚深に瞑想し、論説ではない、実存する真理である咒を唱え、極真に至つて、遂に名も知られぬ、名もなき神、人などには到底、知られぬ神々を召還した。

無際限なる超弩級の大々荒御魂を。

四次元の宇宙を做す大いなる荒御魂は、無辺なる武威とともに、無辺なる叡智、遍照して一切すべて何もかもを觀照する。その力は一切を圧倒するかのようにも見えた。

三次元宇宙は四次元の一断面でしかない。

三次元のことを切った切り口が二次元であるように、三次元に無数の二次元が切り開けるように、四次元から見た三次元もそのような存在なのだ。

現れたるは彝髻羅婁（イシユラル）神。これは大倭の神ではない。

眞神の神であつた。

「何と」

嘉祥は愕き焦った。

大倭の神と眞神の神が手を結んでいたのだ。

奏舞定も顔を顰める。

しかし、舍利子は言った、

「驚くにあたらない。

これは想定範囲だ。やがて世界の神は手を結ぶであろう」

だが、嘉祥は反駁した。

「しかし、眞神の神は史上最も強大と言っている」

「そうだ、油断はできない」

奏舞定も同意する。

宝珠・曼珠・沙華・蓮華は神憑りに入る。

史韋毘は解脱の奥義を無意識に探った。まだまだ究極ではないと感じていた。

第8章 人の知らぬ大いなるいにしへ神巖靈妙の大御神

舍利子の言うとおり、次々と現れたるは、スカンジナビアの神、メソポタミアの神、エジプトの神であった。特にまばゆいギリシアの神は Ουρανός, Ποταμία, Κρόνος などの初源の神々他、Άτλας などの Τυφών 族や、Ζεύς を筆頭とする Ποσειδών などの Δωδεκάθεον その雄大な力は地球の規模を遙かに凌駕していたが、どこか仏教の神々と血脈を同じにしていた。

抑々これはなぜ争うのか。

史韋毘の心にさような疑念が生じたとき、彼の心は宇宙の無窮の中に投げ込まれた。

その虚空の果てなる“處”に一人の男が立っていた。

「やあ、来たね、史韋毘」

さらさらと長い灰色の髪を靡かせ、碧眼白皙。いったい……

「そう言う君は何者だ」

ふ、と不敵な笑みを泛べ、

「僕か。」

僕は玄鳥呶。君と同じく眞の哲学者だ。超越者だよ」

「玄鳥呶だって！ そんな莫迦な」

玄鳥呶は彼の同級生だ。だが、見た目は別人だ。

「驚くにはあたらない。」

彼は僕さ」

史韋毘の頭に理解が浸透した。縁えにしというものか。だから、彼は親友だったのかもしれない。

「なるほど。」

で、ここは、どこだ」

「どこでもない場所さ。場所など心々でしかない」

「僕をここに呼んだのか？ 僕に何か用か、玄鳥呶」

「呼んだ？」

君が来たのさ。

そして、僕は来ることを知っていただけだ。当然だろう、過去も未来も、すべてはツクラレタモノ（捏造）、絡繰り、任意に組み立てられたサイ（差異）というモノに過ぎない。時間は心の時間性であり、時間性はサイとやというモノに過ぎない。

すべては同時に起こっている、という言い方もできる。

だから、すべてを知っていても不思議はない」

史韋毘は彼が眞神人であることを覚った。恐らくは五千年前の眞神人。今で言うリビアか、マケドニアに居住していた時代の眞神人だ。

「もっと巨大なる神々の戦いを。」

人の知らぬ大いなる神を呼ぼう。これから始まるのは、空前絶後で、真奥義、究竟の戦いだ。炎だ。焰だ。最狂裂の大爆発だ。

ビッグ・バンなど素粒子の十の無量大数乗分の、十のマイナス無量大数乗の一よりも遙かに遙かに小さい。

無際限奔放なるがまでの巨魁さよ」

彼は唱う、

五次元の神を呼ぼうぞ。

六次元の神を呼ぼうぞ。

七次元の神を呼ぼうぞ。

八次元の神を呼ぼうぞ。

九次元の神を呼ぼうぞ。

十次元の神を呼ぼうぞ。

次元の数はここまでだ。

十は最終数字。全てを備え揃え整えて十全というのは一つ理あり。指が十本なるも意味あり。

玄鳥叡は言った。

「いかにしようとも超越する無窮無際限の神あり。

喩え百次元であろうと、千億兆次元であろうと、眞神の神、神彝亞晒厨御に及ばず」

第9章 一切皆空ならば日常

「されば、仏教は敗北する」

玄鳥叡はいともあつさりと言った。

史韋毘は静かに瞑目する。

結跏趺坐し、只管止観する。

その姿勢呼吸は真の言辞をする。

「敗北など、形骸でしかない。

執著でしかない。

色受想行識だ。

勝ちも負けもないさ。

君は自ら死の淵に落ちた」

「さよう」

彼はそう言った。

ただ、そう言った。

そして、哄笑した。

黄金のシンバルのような哄笑。

紫摩黄金の霧になった。

微動もしない風に渦巻いて消える。

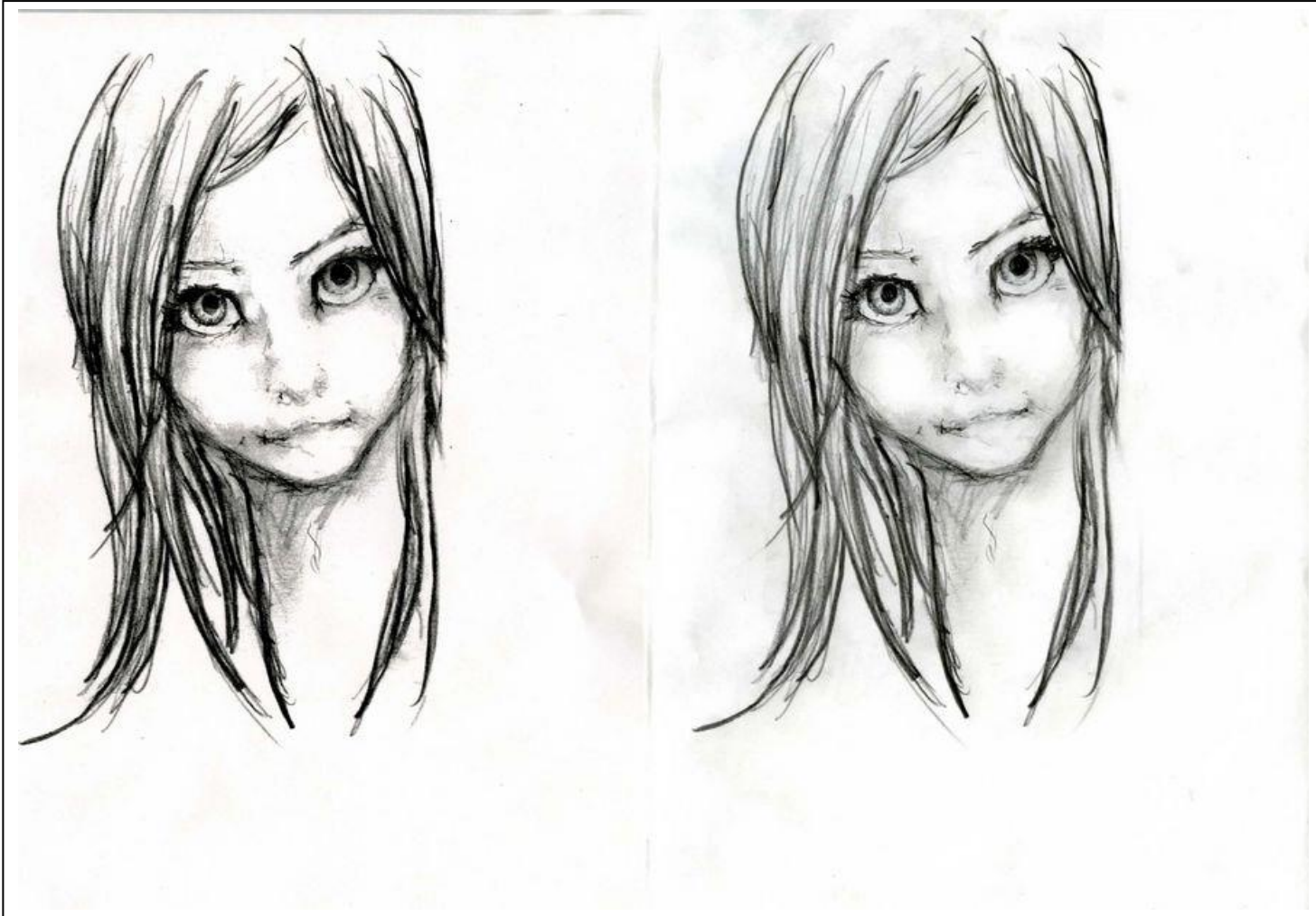
消えた。

玄鳥呶は死んだ。

「だが、死はない」

史韋毘はそう言った。

「すべてを捨てる。しかも、世俗価値からの離脱もしない」



第2部 究竟涅槃

第10章 龍肯

却説、平和な日々の続く眞神村であつた。

総合的学習の時間に、外部講師として龍吞村の天易真兮が来た。

名著『「実存的分析による存在論考」「空」』で、一躍眞神民族の思想界を席捲し、民族の始祖であり、初代王彝玖邇王以来、眞神聖教の真理の奥義及び眞神民族の精神・哲学の究竟を成し遂げた人として名を馳せた眞神魂の中心地とも言うべき思想家だ。

弱冠二十五歳であるが、その風貌は独特、異様ですらある。

円錐形の先が尖ったワイザードハットは途中から折れて下がり、細面に片眼鏡を細く高い鷲鼻にかけ、顎鬚頬髯口髭を膺下丹田まで垂らし、コバルトブルーのサテン地で、肩に金の房飾りや胸に金の紐飾りをつけた古いミリタリー・ロングコート、カフスは大きく二の腕（肘から手首の間）の半ばまで折り返し、黒いTシャツに、16オンスの破れ古着のリーヴァイスを履き、蛇皮のロング・ブーツはよれてルーズ・ソックスのようになってい

る。

彼のある日の講義である。

事前に課題が出されていた。

『論理思考は規定によつてその進み方（航路）が定まっているが、その妥当性に関する証明は古今東西、不可能事であつた。それゆえに、学究の徒は、零からの出発をしなければならない』と。

そして、講義の日。

黒板には、ただ、「究明」と板書された。

「何を究明するんですか」

嘉祥が質問した。

「何かを、です」

「何か、とは」

「何かとは、ともかく何かです。何も確定していませんから。零からの出発です。

我々の自然的な感覚は、我々が何かを認識するとき、我々が何かと対峙してそれを見ているとしていますが、それは絶対に確かではない。

対峙しているという前提を捨て、そもそも、見るとは何かを我々が知らないことを気づくべきです。

無限の選択肢の中で、『見る』という概念（特質）の輪郭線を、なぜ、そのように引いたのか、なぜ、そのよう区切りで区切ったのかも知らない」

「零ではないです。『究明』とか、『何か』とか、根拠の明示もなく、唐突に、既に措定されています」

「仕方ありません。それを言うなら、既に思考と論理を使用しているでしょう」

「いや、使用かどうか、唐突措定です。

その前に、使用とは何か、なぜ、そのような概念の設定があるのか、なぜ、その輪郭が

設けられたのか、どうして、そういう区切りになったのか。

しかし、我々は、そのように問うが、そもそも、何かと問うことは何なのか、何をして
いることになっているのか」

「唐突指定なしでは始まらない。諸考概（思考・概念・意識）は唐突である。

よいかな、では、講義を続ける。

うおほん！

何かとは、ともかく、存在である。すべての物や事象、抽象概念や想いも全部、何もかも、ありとしあるもの（なしとしなきもの）を含みます。

正確には、存在者と言うべきでしょう。究明とは、何かを究明することである限り、存在（存在者含む）の究明のことに他ならない」

「存在とは？」

「表明です」

「先の繰り返しになるので、個々の概念に対する唐突指定を指摘することはやめますが、表明とは、どういうことですか」

「差異です。差異によって物事は表明します」

「なぜ、差異によって、表明するのですか。どのようにして」

「存在者相互の相違があつて、存在者相互が際立つからです」

「なぜ」

「それは、もう、そういうものです。

相違は概念によつて生じる。概念が特質をなし、その特質が相違を生むのです。特質と
いうことが、もう相違を含んでいるのです」

「いつきに飛びましたね。言うまいとは思いましたが、逐一未解明・未証左、一語一語が
全部唐突です。

概念どうしの相違とは何か、特質とは何か。なぜ、特質が相違を生むのか、生むとは、
含むとは。

どうやって、概念は特質をなすのか。概念が特質をなすとは、どういうことか。

なぜ、そのような枠が設定されたか。どうやって、その区切りを選んだか。

つまり、無際限の選択肢の中で、それらが選ばれた理由は」

「わかりません」

「我々は、何も知らされていない」

「知らされていないとは何か、解明とは？ わからないとは？ そもそも、知るとは何を
したことになるのか。

あゝ、いかようにも収まらず、いかようにも遂げられない。どこにも帰着しない。つま
り、無でもなく、絶望でもなく、途方に暮れるのでもない。

時に疑い、時に歎き、人生に努めてください。

以上」

講義は終わった。

まるで生きた曼荼羅だと史韋毘は直観した。

授業が終わると真分は近づいて来て言った。

「というわけで、小生も参戦しよう」

かくして闘いには、眞神の名家の満面、彝之^ゝ裂、同源叭羅蜜斗、天之哥舞伎、天平普蕭などが加わった。

彼らはもともと神彝亞晒厨御の信奉者だった。

「そんなこと関係ない。」

全知全能の神には、異逆もなく、異叛もなく、異他も異外もない。ましてや異教徒などと言う輩は背信者であり、畜生以下の蔑むべき笑止千万の者」

そう言つてかんからから笑う。

しかし、急に真顔になって、

「いや、いや、そうであつても、それは、それで真理である。神は汎神なれば。独り神のごとく消ゆ。

無空である。

真理とは無空を曰う、とすれば、真理は存在しないということだ。
ただの日常茶飯だ。

すべてが真理である」

生徒が質問した。

「では、敢えて何もことを為さなくても、真理に達しているということですか」

真兮はうなずいた。

うなずいたのに、言うことは反対であつた。

「そうとも言おう。」

しかし、まだ足りぬ。一辺倒でしかない。カタチがある。無空ではない。しかも、無空でないこそ無空なのだ。カタチあるこそ善けれ。

何も為さぬとは真に何も為さぬことだ。

何も為さぬを為しては、何も為さぬではない。

しかし、努力するも、革命するも、又現実なれば、真理である。相互矛盾するも、心安住せぬままに真理である。一切真理とは、解し難きもので、論を超える。

成し遂げるも、悩み惑うも真理である。

堪え難きは堪え難きままに、得心ならねども、真理なるとは云うとても、それを克服し、治癒するも、又真理である。

真理に達すべく努力をなさなければ、真理に達し得ないことも、又真理である。

真理に達していない者は達しておらず、真理に達する者は達している。それでも、それらの者どもは真理である。

義しきは義しき。過ちは過ち。誤りは誤りである。違ふは違い、他者から難ぜらるる。

この真理を説くにあたつては、言い間違いなどあり得ないし、又正鵠もない。

神は無辺にして全能萬機」

生徒は肩をすくめた。

「空っぽで無意味な、まさしく空論ですね」

再び真兮は呵々大笑した。

「そうだ、大したことじゃない。唾棄すべき論ではある。

人、龍肯（龍の肯^{がえ}んじ）せよ。しかし、さは言うも、龍肯は爲せず。爲せずとも、龍肯にしあればゆえに。

すなわち、人、義しきと以^{おも}うを爲せ」

第11章 不死の非業死 眞の人

「宇宙の始原を超える太古の神々と争うには、こちらは大真理に到達しなければならない」
嘉祥は激しくさように主張した。

「それは、どのような」

史韋毘は問うた。

「甚深微妙不可説なる眞実奥義だ」

「たとえば」

「論理は言語の綾にしかず、虚しい。

ただ、架空の礎に依拠し、決められた絡繰りを空転するものだ」

「それも論理ですが」

「さよう、さよう、虚しさは言説し難い。批判はすべて論理。

だが、だからと言って、それを難ずるも又論理だ」

「なるほど。それで？」

「言説を越えた妙義、宇宙そのものである実相の真理に達しなければならぬ。実相は理論ではない真理ならぬ真理。ゆえに妙義としか言いようがない。

実際、それで救われる」

「佛陀は不死だったでしょうか」

「死に際し、喉の渇きに苦しみ、水を乞うた」

「なるほど、実相のままというわけですか」

「究竟だ。老病死苦を超えるとは老病死苦を超えることではない。それは嫌忌と同じだ。だが、苦しむことが真理でもない。嫌忌も実相だ。逃れる努力も又真理と言ふべし」

それを聞いて、史韋毘は微笑する。

「僕はそう思いません。

人は不死になれないのは当然として、苦しみをも人は超えられません。わずかにましになるだけでしょう。でも、それでも仕方ない。出来ることをするしかない。出来ることをしなくてはいけません。

人の言葉に心傷附くなら、気にしない努力をしなければなりません。でも、人の非難に耳を貸さなければならぬ時もあります。気に留めても気に病まない努力が必要でしょう。それでも大きな幸せは来ません。でも、小さな幸せは来るでしょう。心に留めるも、気にせず、気に病まず、さらさらと快く生きるよう、心の執著を徐々に薄めなければなりません。

怒りや口惜しさの元になっている自己保存、その奥にある自己肯定の欲をなるべく放下するようにすれば、いくらか癒されます。

妄執や所有・支配・名誉欲の元となる、それらの欲を見透かせば、自ずと気持ちも薄まるでしょう。

痛覚する神経が生きている限りは、肉体の苦しみは超越できません。可能な医療で和ら

げるしかありません。治癒に努めるしかありません。
超越はない。

時を得た、ささやかな癒しまでが可能の範囲内です」
嘉祥は黙った。

さて。

いつしか請来しても、仏や仏教の天は来なくなっていた。

「人類が名すらも知らぬ古代神によって、御仏も消却されてしまったのか」
舍利子が歯噛みして言う。

史韋毘は涼しげな表情だった。

嘉祥はそれを見て何かを覚った。

奏舞定が膝を突き、史韋毘に礼を取った。

「あなたが我らの将となり、師となり、天帝となって導くでありましょう」

皆瞳目したが、さつそく舍利子も奏舞定に倣った。

皆も倣い、史韋毘を盟主と仰ぐ。

第12章 歴史その二

そもそも眞神族はどうして仏教を導入したのか。

西暦五八八年、眞神の王であった彝之昂弓乃あけりてないが飛鳥・斑鳩を撃てと檄を飛ばし、周辺の豪族が結集し、北上して来た大和朝廷の軍と激突した。

初戦の艸限願斐の原の戦いでは、眞神天帝皇軍が圧勝した（大和朝廷側の記述にはただ「胡戎亂ず。大軍將會ふ」としかない）ものの、火々禽の柵の戦いで、眞神は撃破され、以後、民は夷俘となり、大和への朝貢を義務付けられる者となった。

その後は数百年に亘って、何度も朝廷の弾圧を受け、貞観年間（八五九年～八七七年）には（既に大日靈貴への信仰を強制していたが、それで飽き足らず）仏教への帰依を強要された。

そういう事情で建立されたのが、貞観正國寺である。

屈辱の証とも言えるものであった。

だが、眞神族は古来、海外との情報交換が密で、仏教に詳しく、仏教が眞神真教の教理『龍肯』と共通する部分があることなど、知悉していたため、教義そのものは比較的、抵抗もなく、受け入れたのである。

史韋毘は漢から導入した道教の思想なども含め、大いに研究し、大いに発展した。文書に没頭する。紙魚が友だちのようですらあった。

第13章 蛇

すなわち、眞神族は仏教の教義を隠蓑とし、公然と眞神真教の教義を奉じ続けたのである。それは独特の発展を遂げた。

ついては、屍惟蠡という男の力が大いに関与している。道教の『真人』横変死』の思想、仏教の『無空』と、眞神の『龍肯』、これらを同一視し、無上の叡智の完成を成し遂げたのだ。

無空とは、ただ現実があるということだ。

平安時代末期のことであった。世界宗教の状況は激動している。既にイスラム教も世界を席卷していた。近代眞神眞教を中興したのである。

だが、其処には現実主義的ニヒリズムを育む土壌も存していた。現実は無現実でしかない。科学しかない。眞実は事実であり、アイデアや本質はない。論理的な、理性的な眞理はない。

それもまたよし。

価値一切を棄てつも、無空一切平常と雖も（平常は為し難し、平常為さんとせば、それ平常にあらざりき、とてもそれも平常にあらざりき）、さりとて傍若無人なるなかれ、人に迷惑かけるな、世俗の価値に逆らうな、とてもかくても候。

仏陀もスッタニパータにて言う、「慈しみと平静とあわれみと解脱と喜びとを時に忘て修し、一切世間に背くことなく、犀の角のようにただ独り歩め」（岩波文庫より抜粋）

「一切世間に背くことなく」だ！ 究竟究極的な世捨て人でありながら、世俗に背かない！ 無余依涅槃に於いてすらもだ！

捨て去っても、世俗価値塗れの責任を負う。西行など、世捨て人は気楽なるかな。白隠禪師は動中の禅こそ難しと言った。

最高の眞理とは蛇が皮を脱ぐ如く、あの世もこの世も捨て、執著を厭離すること。これが処方だが、理窟はない。どんな仕組みもない。苦しみの原因を断つて苦しみという結果を滅するのではない。どんな理解もない。

ただの行為だ。ただ、事実だ。何事でもない。現実とは、何者でもない。ただ事実がある。蛇が脱皮するがごとく執著を脱げば、よりましになる。

しかし、世間を離るるなかれ。これをもって中庸というべきか。

瞑目した。夢を見る。

さらさらと砂金のように、細かい、くつきりした燦めきが、霧のように清らかに霞み舞う世界。

すべてが明晰だ。鮮やかで、濃い。

涼やかで、暖かく、さらりとしている。水は喉を強く潤し、空気は染み入るように新鮮

どうまい。

全細胞が甦る。最高の充足。欲しいものをすべて完全に永遠に手に入れた気分。もはや死んでも悔いはない。

だが、もしかって欲しいと思っていた数々の物や事柄や、恋愛対象などを想ったりしたら、この幸せのすべてはたちまち壊れてしまうであろう。

欲望の達成とは欲望の焰の消火でもある。欲望が費えれば、その効果は欲望の達成と同じなのである。むしろ欲望を費やす他に欲望の達成方法はないのだ。どんなに得ても完全な満足はなく、火は消えないからである。

だから、あゝ、見よ。

白雲は輝く太陽のように、まばゆい。

天穹の碧さよ。涯なく。

さやかなるかな青海。

美しい溪谷、松の横生する屹嶮たる岩山、様々な緑に籠盛れ上がる深き岡、水滴る清明の杜、ざあーという音を響き渡らせ、狭霧のごとく周囲を湿らせる瀧。

自然と心はきよらさやかに、かろらかに、清流の水のごとく、山奥の森の空気のごとく、心の塵を脱落させ、執著を脱皮する。価値を重たきものと見做し、厭離する。

身体はなくなったかのように軽い。

無辺に自由だ。

何もない。

あゝ、清々しきかな。



話を戻そう。

ニヒリズムのことだ。

さような時勢を反映してか、黄泉の封印が内部から解かれた。

異様な闇の、昏い瞑い深淵から、独りの男が這い上がる。そして、ニカつと笑う。オシリスのように高貴でもなく、サタンのように強くもない。

だが、彼は甦った。

最後の審判の前のように。

世界の四方から暗澹たる黒雲が籠れ揚げた。

世の中は神仏の無効性を認識する時代、現実主義へと、ロストジェネレーションへと大きくシフトしていた。

平清盛が叡山の衆が強訴の御輿に向かって矢を射、世間の耳目を驚かせた時代である。

又その後、鎌倉仏師は写実的な彫刻を顕した。

「神は死んだ」

と言わんばかりであった。人の言う神は滅んだ。真の神だけが残る。武による統治の復活、それは戦国の世の予兆であった。

頼朝は猜疑の下に過酷なる武士の管理社会を築き、信長がそれをさらに強固にする。叡山を焼き払ったのだ。さもありません。強訴など仏教ではない外道ゆえ、仏教を騙った者どもら、死して後も永久に、罵られるが相応しい。

そして、明治、昭和と時代はますます現実主義化する。

さて、欧州に於いては、中世に普遍論争があった。

薔薇自体が存在するという論議は現代ではバカバカしいものに思える。

我々は一つ一つ同じもののない花々を特徴で区別し、幾つもの類に分けた。その一つが薔薇という類（科・属）だ。つまり、個々の薔薇が存在するのであって、薔薇というアイデアは実在ではない。

プラトンは現実に純粋な円（中心から等しい距離にある点（位置があり、拡がりのない存在）を結んで得られる図形）は存在しないのに、なぜ、人は円という概念を得ることができたのか。純粋な円という本質的な存在（アイデア）が、真実の円が存在するからであると考えた。そして、我々の見る不完全な円（現実の円）とは、真実の投影に過ぎない（何によって、なぜ、投影されるのか説明はないが）、だから、不完全なのだと推慮したのである。

トマス・アクイナスはプラトンの弟子であるアリストテレスを研究した神学者で、彼が本質は実在すると考えた根拠にアリストテレスの影響があった。と言うより、当時の中世ヨーロッパは十字軍が遠征から持ち帰った古代ギリシアの哲学の精妙さに舌を巻き、大いに脅威を覚えたのだ。神がなくても世界が説明できてしまう、しかも、より明晰に。

そして、神学との融合を図ったのがトマス・アクイナスである。融和だ。敵を味方に附けたのである。

だが、時代は現実主義へと徐々に向かっていった。

そういう意味では、オッカムのウィリアムの言う方が正しい。トマス・アクイナスは間

違いであった。

だが、幾つか異議を挟ませて貰えば、「なぜ、類なのか、類とは何か、系統化するとは、どういうことか、何をしていることか」

この当たり前なことを改めて問うかのような問いの答えは存在しない。トマス・アクィナスは「神」と言った。そういうふうな答えしかしようがないのである。

幾らでも続けられる。

具体的な実在である個物、個物、個物、と言うが、いったい、個物とは、何か。

人は世界を区切り、切り出して個物とする。だが、区切りの境界線をどうやって選んだのか、その妥当性は立証されているのか。抑々個物という考概は何か。無数に問える。

やがて、こうした問いと答えそのもの、そういうものによる証明方法へも論究できるが、それこそ我らの論考の法則から言えば、自己矛盾である。「証明が済んでいない方法を使用した証明は、証明にならない」からである。

それを言ったら、論理学によれば疑問の生じようもない、などという、更なる矛盾にもなる。だが、何だ、これは。どういうことだ、いや、如何様な思いも及ばない。全くの解決不能だ。どっちつかずだ、どこにも着陸しない、宙ぶらりんだ。

では、どうしようもないのか。解答も不正解も得られず、無か。

ところで、解決不能とは、Ⅱ（イコール）無であろうか。無は一つの特性を持つ。着地点を持つ。持たなければ、我々が今、無に対して持つような理解にはならない。すると、解決不能とイコールではない。

ならば、何と言えばよいのか。どんな理解にもならない、と言えばよいのか。が、それも着地点である。論理思考の齎す自己矛盾なのだが、論理思考以外の思考はしようもない。矛盾は免れない。我らの思考、意識、それらは此れも彼も論理思考の賜物で、どっちつかずは論理思考が勝手に空架したものとと言える。

論理思考の匣の中で、幻影の宙ぶらりん状態なのである。

第15章



そういう歴史的背景を踏まえ、現代。

科学だけの殺伐たる現代。無情の世界。無常の世界。無上の世界。

驚嘆すべき奇跡が起きた。眞神の上空に現れた無数の黄金の耀きの群れ。精霊が、天使長が……、まるで最後の審判のように。四方から喇叭が高く鳴った。

あろうことか、見えるはずのない南十字星が蒼穹に泛ぶ。天の川が震えた。

幾人かのキリスト教徒たちは庭に出て跪き、十字を切る。

眞神にもかつて伴天連と呼ばれた人たちがいた。彼らはその子孫なのである。

眞神族が既に抑圧された民族なのに、その中にいる伴天連の生存は過酷であった。彼らは力ある者の破滅を大昔から伝承している。

右の頬を打たれなば、左の頬をも差し出せ、と言うのに、最後の審判日が用意されているのである。キリストは偉大だが、基督教はそれを正しく伝承しているとは考えにくい。

「この前兆は古代から予言されていた」

眞神に最後の審判の下る日。神々の大々氾濫。呵々大笑のごとき大氾濫。黄金の横溢。

第16章



その異変を見て、貞観正國寺の本堂に籠り、結跏趺坐する嘉祥は変容した。

頭陀第一の摩訶迦葉となり、大いに弁じ、仏教の真理・真義を大華嚴の莊嚴を以て大數衍する。

諸々の神々がその説法に感銘し、天より乳と蜜と薔薇の花びらの雨が降った。

「時代が革まる」

大華嚴なる大真理よ、遍照金剛よ、究竟の大汎神、砂粒が三千世界、入我我入、一切即一、一即一切、微妙の真理は説き難し。不立文字。冷暖自知。

その莊嚴なる太陽の真理、十一次元時空の中の無際限数の次元の中の無際限数の宇宙、これらと、これらに関する一切森羅万象・事象・現象・物象らそれそのものであり、それを遙かに超えて、ありとしあるもの、なしとしなきものであり、それをも超え、それら以外のものでもあり、すらも遙かに超えて、それそのものでないものそれそのものであり、さよう無際限なる無数の諸々考概の及ぶ限りのものそれそのものにして、そも超え、それら以外のものそれそのものであ……というも諸概念のうちであれば、もはや知性及ばず。人知尽きたりし涯。

只唯平伏すことしかできぬ。

人は只管祈るのみを為す。

第17章



聖なるキリストの神の崇高、悲愴、涙あふれる感動、優しさ、巨大なる奇跡の力。

それらによつて、又はいくつもの翼を持つ大天使長によつて、最後の審判の日のように、空は蔽い尽くされ、大いなる力がアジアに振るわれる。

再び西洋による東洋への侵略が始められた。

あの時、無辜の死を遂げた数千万の人々。

天道はどこにあるのか。

正義はあるのか。

自然は過酷である。

なぜ人々にこのような苦しみの心を與えたのか。

なぜ尽きぬ欲望を与えたのか。

生存を終わらせなしたためか。

生存へと駆るためにか。

キリスト教は自由の精神をはらんでいた。神の前の平等。庶民貧民賤民の宗教だったからであろうか。権威の打倒を孕んでいた。

革命とパンク・ロック。

そしていわゆるキリスト教精神とは裏腹に、自由の精神が、時間をかけて欲望を開放し、物質文明を謳歌させた。

さような西洋の物的な氾濫に対し、東洋の神々はいかがしたか。

眞神の神々は、次々と独り神となって、自然の中に溶け込み、一体の汎神となって隠れるように無空に帰す。

それは又、神本来の姿でもあった。もしそうでなければ、今のこの世を見よ、神は存在しないといえないうであろう。

神慮は甚深也。人、これを解さず。

却説。

襲来したのはキリスト教的精神だけではなかった。

おお、そこに力あふれる北欧の神が現れる。髯をたなびかせ、角のある兜をかぶり、壮大なるかな。

角笛が轟き、悲壮なまでに凄絶な戦闘、炮烙する城砦。

ラグナレク（神々の黄昏）だ。まるで愛の宗教へのアイロニーのようであった。

「ヴォータンは我が胸に過酷なる心を置きたり」

北欧民族の誇り高き言葉。

価値は相対によって生じ、それゆえ独り神は消える。無空の思想、相対性の脱却、一切無分別智を謂う仏教は衰退する。

思えば、仏教とは、人為的に本来の神への理解へと至ろうとする試みでもあった。正しい道が必然的にそこへ行き着いたのである。

正義は神にある。

第18章



いったい、眞の敵は誰なのか。もはや、それを問う者はいない。無空すらない。存在（ゝである）はない。ただ、現実がある。

史韋毘は漆黒の闇の中にいた。

彼は振り返った。

まるで過去を顧みるかのようにゆっくりと。

焰が頬を照らす。

見た。

奴がいた。

玄鳥叡は甦ったのだ。

復活したのである。

地獄の熾天使ルシファーのように。その存在者の存在が物象化し、凄まじい氣となつてどす黒く、光や時間さえも吸い込んでしまうブラック・ホールのように恐るべき存在として周囲を重壓する。黒き神。

「神々は甦る。生命は復活する。永遠の死の淵にいつしか寂莫するとも」

玄鳥叡はニヒルに微笑した。

「仏教は最初から勝つ勝負をしている。

いずれ、一切は無に帰す。亦そこから甦るかもしれないが」

「何をどう言おうが、僕の道は変わらない。

人は考え抜いて、正しいと思った方へ進むしかない。答はない。間違っていると思えば、修正する。つまり、努力する。仏教だって、生命活動だ」

玄鳥呶は嘲りを泛べる。

「ふ。

果たしてそうかな。

おまえは哲学の試験でウイルス論を学んだな。

知っているであろう。

ウイルスは新陳代謝しない。生命ではない。なぜなら、生命とは、食を摂って自らを再生産し、エネルギーを作り、行動する。生きることはその努力であり、工夫だ。工夫とは進化だ。

だが、仏教はどうだ。

涅槃はどうだ。出家は、乞食は？ 食を制し、家族も捨てる。生業を持たない。豊かになろうとしない。名を捨てる。美を求めない。音楽を嫌忌する。糞掃衣を着る。飽食しない。

闘わない。

生とは、真逆だ。

仏教は、生命に対するウイルスのような存在だ。反生命だ。

さもありなん、生存の無明から解脱しようとしているのだから。もはや『生存』には還らないと言ったのだから。

風邪のウイルスは乾燥と寒冷で活動を活発化する。生命とは逆だ。又ウイルスのように寄生する。すなわち布施を乞食する」

史韋毘は静かに、厳かに応えた。

「そうではない。

それ以上の無だ。心経を見よ。ウイルスですらない」

玄鳥呶は嘲笑う。

「心経は仏陀死後数百年にできた。非仏説だ」

「だからさ」

Namas Sarvajñāya. āryāvalokiteśvaro bodhisattvo gaṃbhīrāyāṃ prajñāpāramitāyāṃ
carayāṃ
caramāṇo vyavalokayati sma: pañca skandhās, tāṃś ca svabhāvaśūnyān paśyati sma. iha
Śāriputra rūpaṃ śūnyatā, śūnyatāiva rūpaṃ. rūpān na pṛthak śūnyatā, śūnyatāyā na
pṛthag
rūpaṃ. yad rūpaṃ sā śūnyatā, yā śūnyatā tad rūpaṃ. evam eva
vedanā-saṃjñā-saṃskāravijñānāni.
iha Śāriputra sarvadharmāḥ śūnyatālakṣaṇā anutpannā aniruddhā amalāvimalā nonā
na paripūrṇāḥ. tasmāc Chāriputra śūnyatāyāṃ na rūpaṃ na vedanā na saṃjñā na
saṃskārā
na vijñānaṃ. na cakṣuḥ-śrotra-ghrāṇa-jihvā-kāya-manāṃsi, na
rūpa-śabda-gandha-rasaspraśavya-
dharmāḥ, na cakṣur-dhātur yāvan na mano-vijñāna-dhātuḥ. na vidyā nāvidyā na
vidyākṣayo nāvidyākṣayo yāvan na jarāmarāṇaṃ na jarāmarāṇakṣayo na
duḥkha-samudayanirodha-
mārgā, na jñānaṃ na prāptiḥ. tasmād aprāptitvād bodhisattvānāṃ prajñāpāramitāṃ
āśritya viharaty a-cittā varaṇaḥ. cittāvaraṇa-nāstitvād atrasto viparyāsātikrānto
niṣṭhanirvāṇaḥ.
tryadhvavyavasthitāḥ sarva-buddhāḥ prajñāpāramitāṃ āśrityānuttarāṃ
saṃyaksambodhiṃ
abhisambuddhāḥ. tasmāj jñātavyaṃ prajñāpāramitā-mahāmanthro mahāvidyāmanthro
'nuttaramantro 'samāsama-mantraḥ, sarvaduḥkhaśamaṇaḥ. satyam amithyatvāt
prajñāpāramitāyāṃ ukto mantraḥ, tad yathā: gate gate pāragate pāra-saṃgate bodhi
svāhā. iti
Prajñāpāramitā-hṛdayaṃ samāptam.

第3部 究竟箴言『とてもかくても候』

第19章



史韋毘にとつて、異変はその数日前からあった。

屍惟蠡しゐいという男がやって来る。その姿は薔薇窓のような曼陀羅をなす、太陽のように燦めく円環状のコブラで、一切次元の時空全世界の叡智であった。こう告げる。

「仏や天は復活するであろう。まだ神々の勝利ではない」

史韋毘はその言葉を見、印契を結ぶのであった。青白い炎が燃える。

「あゝ」

屍惟蠡はそれを見て、悲しそうですらあった。

「つまり、最終戦争の始まりだ」

彼には、すべてのことがわかつていた。

過去に起こったことは、もちろん、わかっていたし、これから起こることもわかっている。なぜなら、未来は未発生ではないからだ。差異でしかないからだ。

すべては或る意味、『同時』に起こっている。ただ、同時という定義が何であるかは、未と云うのか。

不詳である。ただ唐突に、『納得』という心的現象がある。『納得』という言葉で『納得』されている心的現象がある。ただ、唐突に。

時間軸の上に、時系列に列しているが、それが、いったい、何だと言うのか。何でないと言うのか。ビッグ・バンは未来に起こっているとも言える。

一切の諸考概も亦復。

思想も哲学も真理も真実もない。ただ、現実丈。ひたすら只管事実たるのみ為爾焉。

唐突だが、天易真分がくれた兵器は、左のようなノートの抜粋であった。

『なぜ、非存在ではなく、存在なのか。だが、存在とは？非存在とは？』

存在は「概念」による仕分けの表明、すなわち、差異（概念は仕分けのための便宜上の差異の仮設根拠（後述）。又、それ自体も「組上に上がる」ときには、差異による存在化の対象、すなわち、存在者である）であり、従つて、差異は存在（表出）の仮設根拠（「少なくとも見掛け上は」明確な根拠もなく、根拠としての効果を担っているようにもの。つまり、問い詰めても、『それは、そうだから、そうである』としか言いようがない、いわゆる「自明・当たり前」なこと。概念によつて差異が表出されることや、差異があることによつて存在、又は概念そのものが表出される（概念も亦た存在でもあるので）ことは自明だが、なぜ、差異が表出を生むのか、その根本の仕組みや、在り方の解明（それが何であるか）、そうでなければならぬ理由、意味・意義は解されていない）であり、つまり、表出が存在という所以である。差異なくば存在はない。

それゆえ、存在は、在ると無いを分けることによつて、生まれているかのような見掛け

をなす。又、〴〵の状態で「在る」ことを示す述語、「〴である」も同様に、一つの表出であり、存在を援用している。

それが小生らの脳内（認識活動内・思考内・コギトCogito・意識）で起こっていることなのかどうかはわからない。小生らはそれを見られない、見ようがないから。何がどうなっている、どういうことなのかは知りようがない（不知。そもそも、「知る」なのかどうかはわからない。非知？いや、それすらも）。

同じような理由で、小生らが対象と対峙しているかどうかは確かめられない、確かめようがない。諸考概は、いったい、何を表明しているのか。それが何だというのか。諸考概とは、そもそも、何なのか、どういうことなのか、何が起こっていることになっているのか？

（ならば、いったい、小生は何を言っているのか？ だから、<http://book.google.jp/books?id=5bny6buezhypam4> なのである）

仕分け行為があってもなくとも、現実には、現に存在するではないか、と言う人はいるであらう。

仕分けがあってもなくても、洪水は人を襲い、あまたの物を押し流すではないか、と。それに対しては、こう答える、それも差異である、と。

押し流されたことと、平穏な生活とに差異を設けなければ、それは存在しない。喩えれば、脳の活動が停止した者には、洪水も平穏な生活も差異はない。同じですらない。差異はないとは、そういうことだ。つまり、「差異がない」という特定の状況も、方向性があり、その枠によって網羅するテリトリーがある以上、他との差異に依存して表出しているものであり、差異なくば、「なくなる」。ただ、現実で（が）ある丈^{だけ}。現実とは、無色透明以前である。

ところで、なぜ、「なくなる」と表記するのかと言えば、「なくなる」も網羅するテリトリーのある概念の一つであり、差異に依存するから、差異がなくなすることを表明するには、（一面的には、つまり論理的には）この用語は妥当ではないが、他に言いようがないので、仕方なく使っている、というニュアンスを醸す。

しかし、妥当というも諸概念の一員だ。

こうして考えると、一切の概念もそうだが、それらを素材として意味をならべて、その違互を渡るために飛躍する際に起こる「理解」、すなわち論理思考の論理的な筋道の取り方も「妥当ではない」。その考えが正しいとか、間違っているとか、そもそも、正解だの、誤謬だのいう概念は、いったい、何のことなのか？ 真実とか、妥当とか、妥当じゃないとか、すべての判断は、何か？

論理思考の進め方の規定、諸概念（あらゆる存在理解、物象・事象などの現象、全抽象概念、我々の見ているすべての存在。思うすべての存在、全宇宙の一切）は。

不毛な議論だが、論理思考が妥当かどうかを我々は論理以外の方法では追究できない。だが、我々の論理（の規定）によれば、未検証のものをを用いた検証は検証たるに足らない、ということになっている。論理思考以外の思考もないし、検証も不可能で、我らは与えられたままに渋々用いるしかない。いったい、これをどう考えるべきか。

しかし、こうした曖昧（と思われる）な状態が妥当性を欠くかもしれないという疑念は、そもそも、論理思考から来ているのである。解決不能。いかようにも収まらず、何も成し遂げられない【不収未遂】。ただ、現実が（で）ある丈。

余談だが。

翻って顧みれば、そもそも、諸概念やら思考やら認知・意識やら、すなわち、諸考概に於ける理解を支える、論理思考という方法（航法）は、いったい、何なのか。すべて仮設根拠の手法に依存しているようにしか見えない。「それはそうだからそうである」と。

唐突、勝手に「納得」という心的現象を起こさせ、理屈抜きで明晰判明であるものとなす暴威を振るっているが、我々はこれに従うしかない。他に思考も意識もないからである。

今、こうしているこの批判そのものがその塊である。論理思考のすべてがそうである。では、ここで小生は何を言っていることになるのか。と批判するも、どんな説明も批判も同類だ。その批判自体、何ものか？

しかし、それも亦た論理思考の中でしか成立しない話ではないか？ とは言え、「だから、ダメ」という批判も、論理思考に導かれている（だから、ダメではない？）。

論理思考が論理思考を批判するのは矛盾？ だが、そういう批判（これから証左すべきものとして、俎上に載っている未証左のものをを用いた証左は、証左として妥当ではない）も論理思考に於いて、である（という解析も亦た。いや、それすらも）。

これら批判は飽く迄も、論理思考のルール内でのみ成立するものである。しかも、それ（論理思考）以外の考概（思考・意識・概念）はない。

……ダメなのか、ダメじゃないのか（自らの尾を咬んで喰らい尽くそうとする原蛇ウロボロスは、喰らうのか、喰らわれるのか）？

どこにも着地できない。ただ、現実が（で）ある丈。

さて、

「仕分けがないなら、差異がなく、存在もない」と言うのと、そんなことはない、存在する、と反駁する人は、小生の主張があたかも『万象は無空・零である』と主張しているかのよう聞こえるからであろう。だから、「いや、そうではない。差異の有無是非に関わらず、実際に、それらは、在る」と反駁するのだ。

無とは、在るに対する差異関係によって表出（存在）する存在者である。つまり、洪水氾濫も平穏な生活も差異がない（存在がない）ということは、無であると主張することにすらならない、無色透明以前、「ない」では「ない」（「在る」）、ということである。

先も言ったとおり、「差異がない」自体もないのだ。余談で語った『諸考概』と同じ状態である。

当然だろう、差異及び概念・論考は、同じく仮設根拠の性格を持っている。仮設根拠の性格とは、「仮設」であると感じさせることによって、我々に及ぼす効果を鑑みれば、歴然だ。一言でいえば、「非」※である。但し、この場合の非は非自らも否定する。ウロボロスの円環的な否定語だ。

自らを喰らう蛇は喰らうのか喰らわれているのか、喰らい尽くせるのか。解明できない。

※<http://book.geocities.jp/shhy6/tj3.pdf> (<http://book.geocities.jp/shhy6/index.html>)

却説、纏めて言えば、どういうことになるか。

差異がないとは、一部網羅ではいけないのである。全網羅でなくば。

全網羅という概念も一部網羅だが。

全方向全網羅ということは、真の究竟の空を意味する。

但し、以上のすべては、従前の論理思考、諸考概ルール内に於いて、という限定附である。むろん。

「洪水はないのではない。〃ない〃では〃ない〃（〃ある〃で〃ある〃）。これが、小生が『ただ、現実で（が）ある丈』と言うときに、洩らす感慨である」

平成廿五年七月 手稿』

第20章



大地がうなる。山脈が動く。

悠々と髯髭を靡かせる龍神だ。

背には森や山脈が載っていた。

蠢くたびに地球の自転が狂う。

吉祥なるかな、龍は、首から腕の付け根、腕の付け根から腰、腰から尾までの三つの部の長さがそれぞれ等しく、これを三停という。

その姿は、鹿の角、牛の耳、駱駝の頭、兎の眼して、蛇の首、腹は蜃で、鱗は鯉、爪は鷹のよう、掌は虎のごとしで、これを九似という。

喉の下、逆鱗があつて、これに触れば、たちまち怒り狂う。

雲氣に乘し、陰陽に身を養い、宇宙に徜徉する。

春分の節に天へ登り、秋分は淵に潜み、夏に雲を凌駕し、鱗を奮い、冬は泥に沈む。これら龍が数多現れたのであつた。

飛龍、翼ある應龍、蛟龍、蜃龍、先龍、黃龍、青龍、赤龍、白龍、元龍、黒龍、玉のように透つた涎を垂れる紫龍。角ある榎龍、または縞龍。角のない麤龍、または螭龍。蒼龍、九色の班龍、百里先を見る驪龍。福龍、薄福龍、惡龍、毒龍、垂龍、病龍、蟠龍、火龍、癡龍、懶龍。

またこの他にも憲章、饕餮、蟋蟀、螭虎、金猊、椒圖、鰲魚なども現れた。これらも龍の種類である。

さらには、龍と牛がまぐわって生まれる麒麟も天翔けた。それらの神々しさ、言いようもない。天穹が広大無辺に燦々と、黄金に輝くかようであった。人は苦しめるとき、聖なる龍に祈るがよい。慈雨の雨を降らすであろう。龍神を想え。人々の価値を超越し、無際限に一切次元を跨ぎ、無数の宇宙世界数千億兆光年を、自在に遊弋し、自由に逍遙する。吉祥なるかな。

第21章

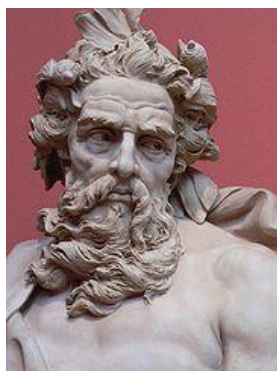


海がうなった。

三叉戟を持った大海神ポセイドーンが現れた。

どんな山の高さよりも深い海が碧い塊となって持ち上がる。

龍とにらみ合った。



ポセイドーン Ποσειδών は古代ギリシアで海と地震を司る神。海洋を司り、大陸をも支える。時に、地震を引き起こし、世界を震わす。

さあ、ともに現れたる神々を言祝ぎ紹介せん。

まずは、ネーレウス Νηρεὺς、海の老人たる、静かなる湾内の海の神。海（ポントス）と大地（ガイア）の子。テティス、アムピトリーテーなど、ネーレーイスらの父。

そして、大西洋なるオーケアノス、その娘ドーリス。

オーケアノス Ωκεανός は、ティーターン一族に属し、外洋の海流を支配する。

テテュス Τηθύς はウーラノス（天）とガイアの娘。巨人族。太陽の沈む西の果てに住む。

ネプトゥーヌス Neptunus、ローマ神話の海神、泉、河、湖を司る。水の神。

案内役は、オオヒノモトの綿津見（ワタツミ）、海・海原そのもの。

ケルト神話のリル（Lir）、その名は正しく「海」。ウェールズ神話のスイール（Llŷr）。

マナナン・マクリル Manannan Mac Lir. ニョルズ Njörðr（古ノルド語）、北欧神話、

ヴァン神族の神も現象する。エーギル Agir（古ノルド語）も又。

カナロア Kanaloa はハワイ四大神の二柱たる海神。又の名をタンガロア Tangaroa と呼ばれる。

マオリの神タンガロア。悪魔の蛸口ゴ・トウム・ヘレと戦った。魚龍の形態。

第22章



空がうなる。

シュメールの天空神アンが現れる。

さまざまな名称で呼ばれる、あるいは呼ばれない天神が現れ、その荘厳さは、悲愴なまでも崇高であった。

アッカドの古代天神アヌ、フルリ人の天神アラル、大気の神エンリル、中国の天帝、モングルの天神テングリ、アフラ・マズダーや、その外に名を言えぬ神々も。

その中には、所謂、仏教で言うところの天もいた。彼らはその大本であるインドの神々

に復元して現れていたのである。

その神々の名を言えば、めでたくも、梵天、帝釈天、持国天・増長天・広目天・多聞天（毘沙門天）の四天王、弁才天（弁財天）、大黒天、吉祥天、韋駄天、摩利支天、歡喜天、金剛力士、鬼子母神（訶梨帝母）、十二神将、十二天、八部衆、二十八部衆。

また、天之御中主神も現れる。

天地海の神々がトライアングルを組むのであった。

それによって宇宙で何かが呼応した。

巨大な龍神が宇宙を遊弋する。

その巨大さは計り知れず、鬚の先で銀河を破壊し、うねる躬は一つの宇宙で収まらず、次元を跨いで、数十の宇宙を貫いて活動した。その名は重力の龍であった。

「俺などまだ小さい。

もつと遙かに大きな巨龍が幾十億も、いや、幾千億兆も、いやいや、数え切れぬほどいる。

人間など何も知らぬのだ。

神の巨大さなど夢にも描けまい」

第23章



燦々たるまばゆき太陽の光が驚嘆すべきまでに光輝を強める。

燦々たる光輝。

燦々たる光輝。

燦々たる光輝。

燦々たる光輝。

燦々たる光輝。

燦々たる光輝。

燦々たる光輝。

燦々たる光輝。

燦々たる光輝。

燦々たる光輝。

燦々たる光輝。

燦々たる光輝。

大毘盧遮那成仏神變加持方等經之帝釈天附名法門

燦々たる光輝。

燦々たる光輝。

燦々たる光輝。

燦々たる光輝。

燦々たる光輝。

燦々たる光輝。

燦々たる光輝。

燦々たる光熙。
燦々たる光熙。
燦々たる光熙。
燦々たる光熙。
燦々たる光熙。
眩い、光燦の横溢。無際限なる自由奔放の大氾濫。
怖ろしくも、それは銀河全体に広がる。

自然法爾の姿のまま（つまり姿なく）現れたるは、摩訶毘盧遮那。アテン神、大日靈貴、
大いなる遍照の炎。

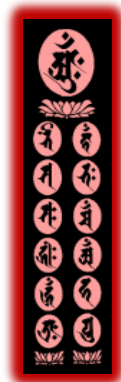
大宇宙には壮麗なる星々の群れ。

際限のない、大いなる光の氾濫、光の潮が押し寄せる。

大宇宙のみならず、一切宇宙を光燦で貫く。十一次元時空に、無数にある次元に、無数に繰り広げられたる大宇宙を渉る、燦めき溢れ眩い、聖の聖なる真理の実存である大々々々
曼荼羅。オーム・マニ・パドメ・フーム（庵摩拏鉢訥銘吽：ॐ ह्रीं फूं ह्रीं : hri fū hri）
究極真なる太極究竟奥々義之大太々真。

因縁の夢泡
アヴィツィヤー パッチャー サンカラー、サンカラ パッチャー ヴィンニヤナン、
無明に縁って行が注じる。行に縁って識が注じる。
ヴィンニヤナ パッチャー ナマルマパ、ナマルマパ パッチャー サラーヤタナ
ン
識に縁って名色が注じる。名色に縁って六処が注じる。
サラーヤタナ パッチャー パッサ、パッサ パッチャー ヴェーダナー、
六処に縁って触が注じる。触に縁って受が注じる。
ヴェーダナー パッチャー タンハー、タンハー パッチャー ウパーダーナン、
受に縁って渴愛が注じる。渴愛に縁って固執が注じる。
ウパーダーナ パッチャー バヴァ、バヴァ パッチャー ジャーティ、
固執に縁って有が注じる。有に縁って生が注じる。
ジャーティ パッチャー ジャラー マラナン ソカ パリデーヴァ
生に縁って老 死 憂愁 悲泣
ドゥッカ ドマナッサ ウパヤーサー サルッジャンティ、
苦しみ 悩み 落ち込みが現れる。
ヨーヴァ メータッサ ケーヴァラッサ ドゥッカツカランダッサ サムダヨー ホーティ。
このようにして、このすべての苦痛の生起もある。
アヴィツィヤー ヤツツヴェーヴァ アセーサ ヴィラーガ ニロードー サンカラ ニロ
ードー
無明こそが滅することに縁って行が滅する。
サンカラ ニロードー ヴィンニヤナ ニロードー、ヴィンニヤナ ニロードー ナマ
ループ ニロードー、
行が滅することに縁って識が滅する。識が滅することに縁って名色が滅する。
ナマルマパ ニロードー サラーヤタナ ニロードー、サラーヤタナ ニロードー パッサ
ニロードー、
名色が滅することに縁って六処が滅する。六処が滅することに縁って触が滅する。
パッサ ニロードー ヴェーダナー ニロードー、ヴェーダナー ニロードー タンハー ニロ
ードー、
触が滅することに縁って受が滅する。受が滅することに縁って渴愛が滅する。
タンハー ニロードー ウパーダーナ ニロードー、ウパーダーナ ニロードー バヴァ ニロ
ードー、
渴愛が滅することに縁って固執が滅する。固執が滅することに縁って有が滅する。
バヴァ ニロードー ジャーティ ニロードー、ジャーティ ニロードー ジャラー マラナン
ソカ パリデーヴァ
有が滅することに縁って生が滅する。生が滅することに縁って老 死 憂愁 悲泣
ドゥッカ ドマナッサ ウパヤーサー ニルッジャンティ
苦しみ 悩み 落ち込みが滅する。
ヨーヴァ メータッサ ケーヴァラッサ ドゥッカツカランダッサ ニロードー ホーティ。
このようにして、このすべての苦痛の滅もある。
釈迦牟尼の無上なる正覚を得たとき、最初に述べられた歓喜の言葉
アネーカ ジャーティ サンサーラン サンダーヴィッサン アニッビサン
ねたくい幾多の生涯をたって生死の海に無益に縋めぐって来た
ガカーラカン ガヴェーサントー ドゥッカー ジャーティ プナッパナン
家庭（この五蘊體と言う身体）の作者をさがしもとめてあの生涯この生涯とくりかすのは苦しい
ことである
ガカーラカ ディットーシ プナ ゲマシ ナ カマシ
家庭の作者よ！汝の旧作は見れってしまった。汝はもうが家庭を作ることばないであろう。
サッパー テー パースカー パッサー ガクワン ヴィサンキタン
汝の親類は（真実）すべてが死んだ。家の屋母は（無明）壊れてしまった。
ヴィサンカラ ガタン チタン タンハーナン カヤ マッジャガ
心は非染作用（行）を離れて、渴愛を減らし尽くした。

第24章



いったい、この壮大な力は何だ。銀河系が自分をにらむかのような畏怖を覚える。名も知られぬ宇宙草創の時代の古代神。

あゝ、宇宙の巨大さよ。大地はこれほど果て無く広いのに、海はそれよりも広大だという。ならば地球の大きさは、いかほどか。

しかし、その地球すら太陽の百分の一以下でしかない。太陽を廻る太陽系の広さは、太陽の大きさの三千倍以上だ。だが、銀河系はそれよりもはるかに大きい。銀河団はさらに大きい。

光りは地球を一秒で七周半するが、宇宙の涯から果てまで行くのには四百億年以上もかかる。四百数十億光年の距離だ。

だが、この三次元宇宙ですら、十一次元時空の世界の中に無限に十次元時空があり、十次元時空に無限に九次元時空があり、九次元時空に無限に八次元時空があり……三次元には無限に二次元があり、二次元には無限に一次元があり、一次元には無限に零次元があり、零次元には……。

古来、三千大千世界（十万億土）と言うも、かなり控えめな数字と言わなければならない。

人知及ばず。
想像を絶す。

第25章



第26章



蒼穹に神彝亞呷厨御の聖なる象徴である^エが一つになった聖文字、天空の真ん中に衣類をはためかせ、翻し、超然と浮かび上がる姿。

「玄鳥呶！」

史韋毘が叫ぶ。

玄鳥呶はゆつくりまぶたを上げた。

表情はない。

「おまえだったのか」

史韋毘が微かにつぶやく。

玄鳥呶がかつと眼を睜く。

彼は紫摩黄金に輝く炎のように立ち昇っていた。赫奕と。燦然と。

翼を左右に伸ばし、十字架のようでもあった。翼は48枚ある。ヘラジカのような大きな角と、それよりは小さい水牛のような角と、羊のような渦巻く角を左右に一本ずつ荘厳していた。

「俺は究竟に達した。

何者も俺を超えられない。それは不可能だ。なぜなら」

敷衍する。

「俺は沙門となり、苦行者した。何人も生きることには堪えられない、恐るべき荒野にて。結跏趺坐した。

燃えるタパスのごとく熱く甚深なる瞑想に入った。想念を凝らした。

さまざまな観をなし、我入我の境地に入って、さらに奥に入り込み、脱自した。エクスタシスだ。

俺は脱自して宇宙を光速よりも速く飛んだ。

そして、恒星の爆発した後に生じたブラック・ホールに入った。そこには凄まじい質量があり、もの凄い重力が働いていて、時間や空間すらも屈していた。時間は速度を緩め、空間は間延びしていた。

その引力の究極の一点に行くと、俺は凄絶なる速さで牽かれ、三次元の空間なる我らが宇宙を飛び出していた。

そして俺は知った。三次元宇宙は四次元宇宙の部分であると。

たとえば、ハムの切り口は平面で二次元だ。ハム（立体・三次元）と切り口の関係のようなものなのだ。

比喻で言えば、四次元を切った断面が三次元というわけだ。

すると、四次元は五次元の切り口と言うことになる。

五次元は六次元、六次元は七次元……しかし、永遠に続くわけではない。

単純な理屈で言えば、無限にありそうなものだが、現実には理不尽だ。十次元までしかない。俺は観じた。

そういう意味で十という数字にはやはり何か意味があるのかもしれない。

おまえは十次元の空間を空想できるか？

できまい。

理知を絶する。俺は言葉や概念ではなくその真秘奥義を体得した。空前絶後の秘術を見よ。かつて誰も解いたことのない真理を観ぜよ」

玄鳥呶は誰も解くことのなかった究竟窮極の真奥義なる秘印契を結ぶ。

宇宙全体の轟音が聴こえた。

「おお」

史韋毘は蒼白になって驚愕した。道Taoだ。

大宇宙だ。

この広大な地球を一秒で七周半するという光速ですらも、四百数十億年かかるといふ広さ。想像を絶す。空前絶後とはこのことか。

玄鳥呶は聖なる文を紡ぎ綴る荘厳なる威光に飾られ、史韋毘を睥睨した。

「決まったな。」

「もはや、この上はない」

「それでもない」

「負け惜しみを言うな。」

「なるほど、おまえでもできたかもしれない。だが、時期を失した。俺の戦略勝ちだ」

「ふふ」

「何？」

「それで勝ったと思うとは、愚かな」

「ぷつ。負け惜しみか。愚かな。おまえも知っていよう。これよりも上はない」

「そうかな」

「何？」

「この世には平行宇宙がある。宇宙は無数にあるのかもしれない。その広大さは数千兆光年かもしれない」

「……んっ！」

「違うか？」

「違うまい。だが、やってみよ。俺はそれを超えよう」

「あはは」

「何がおかしい」

「あゝ、可笑しいさ」

「俺は必ず超える。考えようはいくらでもある。諸考概は無際限だ」

「だろうな」

「何だと？ 手があるなら、さっさとやってみろ、はったり野郎が！」

「なるほど、巨大さを競ってはキリがないかもな」

「俺が超えれば、おまえはまたさらに超えるということか？」

「いや」

「では、何だ？」

「わからんか、大きさにはキリがない」

「わかるわ。だから、どうしようとしているのか、おまえは」

「究竟がある。その上がないものだ」

「何っ？」

「まだわからんか。つまり、無空だ。」

「無がある、ということだ。いや、無がないというべきか。ないことが無の存在証明であるとせば」

「う、うぬぬ……」

「だが、無は、無は何もしない」

「そのとおりだ。平常道みたいなものさ。為さんとせば、離るる。無たらんとすれば、有になる」

「俺をからかうか」

「決着はつかない。それだけのことさ。それが真の解脱だ」

「解脱……」

「わかったようだな」

「解脱、仏陀……」

「そうだ。究竟の解脱者である釈迦牟尼はただの人として、病気で疲弊し老衰し、喉の渇きを訴えて死した。

仏陀は永久なる真人、永遠の不死だ。

おまえも知っているだろう。大した知識じゃない。習ったはずさ」

正氣が躬體を流れる。清明けく身に霞みて金霧の霧をなす。心機が起こり、執著が脱落する。

第27章



史韋毘はいかような印契も結ばなかった。眼にも心にもは観えない存在の光で輝いていた。

いかような咒をも誦さなかった。生きている（存在している）ことが咒だ。

いかような観すらも做ら^{つく}なかった。

だが、それは起こった。起こっている。既に起こっていた。無限の過去から未来永劫まで。

玄鳥呶はその究竟の神を心で観じた。

しかし、もはや驚くことすらできない。思惟を絶するからだ。知には限界があり、それはすぐに来る。

喩えて言えば、『神は我ら人間の範疇など遙かに凌駕・超越する』ということだ。

その究竟神は（これもまた喩えて言うしかないが）『汎^{ひかり}てなる神』である。だが、それは『汎^{ひかり}てなる神』と同じではない。『汎^{ひかり}て』とは人のカテゴリーに過ぎない（という批判すらも又同）。

真の『汎^{ひかり}てなる神』は了解を絶する。

それが全宇宙一切である神、自然法爾の究竟神、ありとしあるものにしてなしとしなきもの、それ以外のものでもあり、究竟神ならぬものでもあり、考概の及ぶもの汎^{ひかり}てであるのみならず、それ以外すらもあ……だが、それは考概の範疇ではないか。究竟神は語れず、意識にできず、さような枠組みにすらならず……

絶句すらできない。

それが眞神族の謂うところの、大奥真義なる神・彝而呬厨御（カム・イアレズヲ）であった。ヴェーダで謂うところの、耀^{ひかり}なる一切自在萬象自爾なるアスラ神。又は輪舞流転破壊生成窮みなきシヴァ神。

「あ、あゝ」

そもそも、汎^{ひかり}てとは何か。

我々には全宇宙のことだと思える。だが、宇宙とは何であろうか。どのようななっ

るのであるか。

宇宙は十次元の空間と一次元の時間で成り立つ十一次元時空だという。たとえば三次元だとしよう。これを切れば切り口は二次元だ。切り込みはいくらでも入れられるので、数多の二次元世界ができる。十次元空間に無数の三次元世界、すなわち宇宙がある。

十一次元時空のエネルギーは無限大である。

一つの三次元の発生であるビッグ・バンすら凄まじいエネルギーなのに、想像を遙かに絶する。

大古代神はこの大フュシス（『フュシス』は古代希臘語。『自然』の意）そのものである。それをしてそれとならしめる力、すなわち法、法そのもの、自然法爾とも言える。

だが、この十一次元時空だけが汎ての全てであろうか。ありとしあるもの、なしとしなきものらの全てであろうか。いやさ、それら以外も含めずば、汎てとは、言わぬのではないか。諸考概の及ぶ限りの全て、いや、それすらも超え…、超える？

“超える”とか、“超えない”とか言うのは、『〜である』『〜でない』ということであり、フォルムを持つこと、輪郭があること、他と境界線を持つことであり、それが何であるかを特定し、囲い、枠を組み、線を引くことだ。これは晰らかに概念の特性である。概念は考概の生むものではないか。

考概でないもの、考概を超えたものと言ったところで、考概を超えたことにならない。考概の範疇表の中にある。

では、考概を超えとはどういうことか。ない。無空だ。何をしてても考概になってしまふではないか。他にできるか？ できない。絶対にない。零だ。それも考概だが。

諸考概をも超えるとは、宇宙の涯の涯よりも最果て、思念も考概も及ばぬ處、それは、零、無空。

をそもめ余。



すべてを無と知る。とは、何も知らないことである。平常道を目指せば、平常道でないように、知れば無ではない。いや、知れば無ではない、などと決めつけられるようなものは無いやないよね（笑）。又それすらも。

すらも。

人は知れば素に戻れない。単純素朴に、人の世の価値観を信じて死ねれば、それは、もうとても幸せなこと也。

どうせ無常も概念のうち。世間融通の観と何が変わるか。変わらないのだから。だったら世間のまゝが幸せだが、一度疑いを持ってしまえば、あゝ、もはや元には戻れない。

踏み込めば進むしかないシステムらしい。それがわかったことで、いったい、何がわかったことになるのか。とてもかくても。

無執著という行為は、ただの事実。

ただ只管事実であつて、何事でもない。

理解などあるものか。在って堪るか。執著という因を滅することによって、苦しみという果が滅するのではない。

唯、只管、それを行えば、苦しみが癒える、いや、いくらかは快方に向かうらしいという行為である。

あゝ。

仲間の中におけば、遊戯と歓楽とがある。また子らに対する情愛は甚だ大である。愛しき者と別れることを厭いながらも、犀の角のようにただ独り歩め。

慈しみと平静とあわれみと解脱と喜びとを時に応じて修め、世間すべてに背くことなく、犀の角のようにただ独り歩め。

彼はふと気が附く。

粗い筆跡でノートに書きなぐられた文字。

……蒼穹は静謐であつた。掛け時計がコツコツと鳴っている。数学はいつもここで勉強していた。僕は喫茶店にいる。それは何者でもない。ですらも……

アヴァローキテーシュヴァラが微笑んだ。大曼荼羅のように。

小説に於いてはあり得べからざることだが、最後に一言、補足したい。レフ・ニコラエヴィチ・トルストイのようにエピソード第二篇まで書いてみたいところだが、あれは偉大なる天才にのみ許されたこと。

本文は、「零・無空」と言つて終わるが、零・無空と言うも、存在（『である』ということ）であることに一向変わりない。なぜなら、「零（無空）である」ということだからだ。

我らが概念上に定義する無空、零とは相容れない。

このどうしようもない矛盾は、思惟上、概念を免れようがないという、システムのな、根源的な絡繰りによるものだ。

※こういうことを『矛盾』という事象として捉えることが既に、我々にア・プリオリに與られ

た範疇に拠る位置附で、範疇内でしか有効ではない、空架な、限定的な捉えである。

「如何ような概念にも当て嵌まらない零、無空」などと言ったところで、そのような囲い込み、特徴づけも、一つの概念化である。

ならば、何と言うべきであろうか。

考えれば考えるほど、思惟（概念世界）という球体の奥に封じ込まれる。判断中止（エポケー）をすべきか？ するならば、真のエポケーをするしかない。だが、非概念と同様、達成不可能である。

意識喪失中も無意識が動いているとすれば、もう死しかない。死中の思惟？

そんなもの、いくら考え始めても、論理上は矛盾しかない。

言いかけた唇の動きは言葉を継ぐことができずに止まってしまい、あぐり開いたまま、茫然とするしかない。如何ような納得すらも遂げられず、何處の如何ような心持ちにも収まらぬまま。

未遂不収とは、如何なる説明・解明にも至れぬこともある。

何かを説明・解明しようとするとき、如何にするか。

たとえば、「犬とは何か？」という、問いというようなものを発し、「哺乳類である」という答というようなものを置いて、「犬」と「哺乳類」という、異なる二つ（又は二つ以上）の事項を結び付け、その差異を埋める係わりが心的に磨り合わされ、「納得」という感情が湧く瞬間、理解という心的現象が生まれる。

これを仮に、AⅡB方式と言おう。

そもそも、これら一連の行為は何か？

そう問いたところだが、それはAという定規で引いた7cmの線が確かに7cmであるかどうかを確認するために同じA定規を使うようなものだ。

なぜなら、問うことは一連の行為の一部であり、これから解明しようと思う事象を解明

するのに、その事象の一部を使うことは、論理の約束上、無意味な検証方法ということに定められているからだ。

だが、逆に言えば、論理という約束の上の破綻でしかないとも言える。しかし、そういう批判自体が論理という約束上にしか成立していない。

全体としてそういうふうに見える。

思惟上、論理の約束を免れることはできないという、システムのな、根源的な絡繰りだ。むろん、実際に絡繰りかどうかなんて、わかるわけがない。

論理という約束にしたがったA $\parallel$ B方式による思惟の仕組（以下、「論理思考」と言おう）に拠って（いるかのようにも観える。さよう観えるかのように「與られ」ている。但し、『與られる』という形式であるかどうか確かめようもなく、『與られる』ということが、どういうことであるかも不詳であり、『納得』という、心的現象しか観られない。観られる範囲の限りでは）観察をし、解釈をする限りは、問い質すことは、虚しいばかりでなく、かように（問答を虚しいと）批判する批判自身すらも、「それすら問答の成果ではないか、それもまた無効ではないのか」と嘲るかのような批判を自縄自縛的に受けてしまうのである。

論理思考の範疇に拠る位置附に於いては、どうしようもない中途半端な状態に、宙ぶらりんになってしまい、行方をなくす。だが、論理思考以外の意識は意識上に顕在し得ない。

※「意識は意識上に」、すなわち意識は事象であり、かつ事象の起こる場でもある。

さて、論理思考の式に拠って表すと、次の式群に拠って表される。完全ではない。というか、完全という概念が論理思考の範疇に拠る位置附けでしかない（かくいう批判すらも又同）。

是ではない。それゆえ、**非**である。

非ではない。それゆえ、**是**である。

是でも**非**でもある、ではない。それゆえ、**是**でも**非**でもない。

是でも**非**でもない、ではない。それゆえ、**是**でも**非**でもある。

“**非**である。**是**である。**是**でも**非**でもある。**是**でも**非**でもない。”（以下、「四条」という）

という四条各条の奚れでもある、ではない。それゆえ、四条の奚れにも当て嵌まらない。

“四条の奚れにも当て嵌まらない”には当て嵌まらない。それゆえ、奚れかに当て嵌まる。以下、かたちを変えながら同じ構造の式が延々と無限に繰り返す。

こんな感じか。

寧くんど遂ぐるや、焉くにか収まるものかは。放置といふにやや似る（但し、放置といふ志向すらなき真の放置）、<http://kei.gutenberg.org/ebooks/25449>

さて、舍利弗、我們、こんなことをしていて、どうするつもりか。如何な得心も当て嵌まらないのに。当て嵌まらないにすらなれないのに。

※但し、当て嵌まらないになれないことを知覚することはできない。





『ブツダのことば』―スッタニパータ（岩波文庫） 中村元 訳

第一 蛇の章

一、蛇

蛇の毒が身体のすみずみにひろがるのを薬で制するように、怒りが起こったのを制する修行者比丘は、この世とかの世とともに捨て去る。 蛇が脱皮して古い皮を捨て去るようなものである。

池に生える蓮華を、水にもぐって折り取るように、すっかり愛欲を断ってしまった修行者は、この世とかの世とともに捨て去る。 蛇が脱皮して古い皮を捨て去るようなものである。

奔り流れる妄執の水流を涸らし尽して余すことのない修行者は、この世とかの世とともに捨て去る。 蛇が脱皮して古い皮を捨て去るようなものである。

激流が弱々しい葦の橋を壊すように、すっかり驕慢を減し尽くした修行者は、この世とかの世とともに捨て去る。 蛇が脱皮して古い皮を捨て去るようなものである。

無花果の樹の林の中に花を探し求めて得られないように、諸々の生存状態のうちに堅固なものを見いださない修行者は、この世とかの世とともに捨て去る。 蛇が脱皮して古い皮を捨て去るようなものである。

内に怒ることなく、世の栄枯盛衰を超越した修行者は、この世とかの世とともに捨て去る。 蛇が脱皮して古い皮を捨て去るようなものである。

想念を焼き尽くして余すことなく、心の内がよく整えられた修行者は、この世とかの世とともに捨て去る。 蛇が脱皮して古い皮を捨て去るようなものである。

走っても疾過ぎることなく、また遅れることもなく、すべてこの妄想をのり越えた修行者は、この世とかの世とともに捨て去る。 蛇が脱皮して古い皮を捨て去るようなものである。

走っても疾過ぎることなく、また遅れることもなく、「世間における一切のものは虚妄である」と知っている修行者は、この世とかの世とともに捨て去る。 蛇が脱皮して古い皮を捨て去るようなものである。

走っても疾過ぎることなく、また遅れることもなく、「一切のものは虚妄である」と知って貪りを離れた修行者は、この世とかの世とをともに捨て去る。蛇が脱皮して古い皮を捨て去るようなものである。

走っても疾過ぎることなく、また遅れることもなく、「一切のものは虚妄である」と知って愛欲を離れた修行者は、この世とかの世とをともに捨て去る。蛇が脱皮して古い皮を捨て去るようなものである。

走っても疾過ぎることなく、また遅れることもなく、「一切のものは虚妄である」と知って憎悪を離れた修行者は、この世とかの世とをともに捨て去る。蛇が脱皮して古い皮を捨て去るようなものである。

走っても疾過ぎることなく、また遅れることもなく、「一切のものは虚妄である」と知って迷妄を離れた修行者は、この世とかの世とをともに捨て去る。――蛇が脱皮して古い皮を捨て去るようなものである。

悪い習性がいささかも存することなく、悪の根を抜き取った修行者は、この世とかの世とをともに捨て去る。蛇が脱皮して古い皮を捨て去るようなものである。

この世に還り来る縁となるく煩惱から生ずるものゝをいささかもたない修行者は、この世とかの世とをともに捨て去る。蛇が脱皮して古い皮を捨て去るようなものである。

ひとを生存に縛りつける原因となるく妄執から生ずるものゝをいささかもたない修行者はこの世とかの世とをともに捨て去る。蛇が脱皮して古い皮を捨て去るようなものである。

五つの蓋いを捨て、悩みなく、疑惑を越え、苦悩の矢を抜き去られた修行者は、この世とかの世とをともに捨て去る。蛇が脱皮して古い皮を捨て去るようなものである。

三、犀の角

あらゆる生きものに対して暴力を加えることなく、あらゆる生きもののいずれをも悩ますことなく、また子を欲するなかれ。況や朋友をや。犀の角のようにただ独り歩め。

交わりをしたならば愛情が生じる。愛情にしたがってこの苦しみが起こる。愛情から禍いの生じることを観察して、犀の角のようにただ独り歩め。

朋友・親友に憐れみをかけ、心がほだされると、おのが利を失う。親しみにはこの恐れのあることを観察して、犀の角のようにただ独り歩め。

子や妻に対する愛著は、たしかに枝の広く茂った竹が互いに相絡むようなものである。

箭が他のものにまつわりつくことのないように、犀の角のようにただ独り歩め。

林の中で、縛られていない鹿が食物を求めて欲するところに赴くように、聡明な人は独立自由をめざして、犀の角のようにただ独り歩め。

仲間の中におれば、休むにも、立つにも、行くにも、旅するにも、つねにひとに呼びかけられる。他人に従属しない独立自由をめざして、犀の角のようにただ独り歩め。

仲間の中におけば、遊戯と歓楽とがある。また子らに対する情愛は甚だ大である。愛しき者と別れることを厭いながらも、犀の角のようにただ独り歩め。

四方のどこでも赴き、害心あることなく、何でも得たもので満足し、諸々の苦痛に堪えて、恐れることなく、犀の角のようにただ独り歩め。

出家者でありながらなお不満の念をいだいている人々がいる。また家に住まう在家者でも同様である。だから他人の子女にかかわること少し、犀の角のようにただ独り歩め。

葉の落ちたコーヴィラーラ樹のように、在家者のしるしを捨て去って、在家の束縛を断ち切って、健き人はただ独り歩め。

もしも汝が、賢明で協同し行儀正しい明敏な同伴者を得たならば、あらゆる危難にうち勝ち、こころ喜び、気をおちつかせて、かれとともに歩め。

しかし、もし汝が、賢明で協同し、行儀正しい明敏な同伴者を得ないならば、譬えば王が征服した国を捨て去るようにして、犀の角のようにただ独り歩め。

我々は実に朋友を得る幸を讃め称える。自分より勝れあるいは等しい朋友には、親しみ近づくべきである。このような朋友を得ることができなければ、罪過のない生活を楽しんで、犀の角のようにただ独り歩め。

金の細工人がみごとに仕上げた二つの輝く黄金の腕輪を、一つの腕にはめれば、ぶつかり合う。それを見て、犀の角のようにただ独り歩め。

このように二人でいるならば、われに饒舌といさかいとが起るであろう。未来にこの恐れのあることを察して、犀の角のようにただ独り歩め。

実に欲望は色とりどりで甘美であり、心に楽しく、種々のかたちで、心を攪乱する。欲望の対象にはこの患いのあることを見て、犀の角のようにただ独り歩め。

これはわたくしにとって災害であり、腫物であり、禍であり、病であり、矢であり、恐怖である。諸々の欲望の対象には、この恐ろしさのあることを見て、犀の角のようにただ独り歩め。

寒さと暑さと、飢えと渴えと、風と太陽の熱と、蛇と蛇と、——これらすべてのものにうち勝って、犀の角のようにただ独り歩め。

肩がしつかりと發育し蓮華のようにみごとな巨大な象は、その群を離れて、欲するがままに森の中を遊歩する。そのように、犀の角のようにただ独り歩め。

集会を楽しむ人には、暫時の解脱に至るべきことわりもない。太陽の末裔くブツダ>のことばをこころがけて、犀の角のようにただ独り歩め。

相争う哲学的見解を越え、さとりに至る決定に達し、道を得ている人は、「われは智慧が生じた。もはや他の人に指導される要がない」と知って、犀の角のようにただ独り歩め。

食ることなく、詐ることなく、渴望することなく、見せかけで覆うことなく、濁りと迷妄とを除き去り、全世界において妄執のないものとなって、犀の角のようにただ独り歩め。

義ならざるものを見て邪曲にとらわれている悪い朋友を避けよ。貪りに耽って怠っている人に、みずから親しむな。犀の角のようにただ独り歩め。

学識ゆたかで真理をわきまえ、高邁・明敏な友と交われ。いろいろと為になることから知り、疑惑を去って、犀の角のようにただ独り歩め。

世の中の遊戯や娯楽に、満足を感じることなく、心ひかれることなく、身の装飾を離れて、真実を語り、犀の角のようにただ独り歩め。

妻子も、父母も、財産も穀物も、親類やそのほかあらゆる欲望までも、すべて捨てて、犀の角のようにただ独り歩め。

「これは執著である。ここには楽しみは少なく、快い味わいも少なく、苦しみが多い。これは魚を釣る釣り針である」と知って、賢者は、犀の角のようにただ独り歩め。

水の中の魚が網を破るように、また火がすでに焼いたところに戻ってこないように、諸々の煩惱の結び目を破り去って、犀の角のようにただ独り歩め。

俯して視、とめどなくうつろうことなく、諸々の感官を防いで守り、こころを護り慎み、煩惱の流れ出ることなく、煩惱の火に焼かれることもなく、犀の角のようにただ独り歩め。

葉の落ちたパーリチャッタ樹のように、在家者の諸々のしるしを除き去って、出家して袈裟の衣をまとい、犀の角のようにただ独り歩め。

諸々の味を食ることなく、えり好みすることなく、他人を養うことなく、戸ごとに食を

乞い、家々に心をつなぐことなく、犀の角のようにただ独り歩め。

こころの五つの覆いを断ち切って、すべてに付随して起る悪しき悩み随煩惱を除き去り、なにものかにかたよることなく、愛念の過ちを断ち切って、犀の角のようにただ独り歩め。

以前に経験した楽しみと苦しみを擲ち、また快さと憂いとを擲って、清らかな平静と安らいとを得て、犀の角のようにただ独り歩め。

最高の目的を達成するために努力策励し、こころが怯むことなく、行いに怠ることなく、堅固な活動をなし、体力と智力とを具え、犀の角のようにただ独り歩め。

独座と禅定を捨てることなく、諸々のことがらについて常に理法に従って行い、諸々の生存には患いのあることを確かに知って、犀の角のようにただ独り歩め。

妄執の消滅を求めて、怠らず、明敏であって、学ぶこと深く、こころをとどめ、理法を明らかに知り、自制し、努力して、犀の角のようにただ独り歩め。

音声に驚かない獅子のように、網にとらえられない風のように、水に汚されない蓮のように、犀の角のようにただ独り歩め。

齒牙強く獣どもの王である獅子が他の獣にうち勝ち制圧してふるまうように、辺地の坐臥に親しめ。犀の角のようにただ独り歩め。

慈しみと平静とあわれみと解脱と喜びとを時に応じて修め、世間すべてに背くことなく、犀の角のようにただ独り歩め。

貪欲と嫌悪と迷妄とを捨て、結び目を破り、命の失うのを恐れることなく、犀の角のようにただ独り歩め。

今の人々は自分の利益のために、交わりを結び、また他人に奉仕する。今日、利益をめざさない友は、得がたい。自分の利益のみを知る人間は、きたならない。犀の角のようにただ独り歩め。

